

---

ETERNAL SAGA genus.

紫音

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ETERNAL SAGA genus .

### 【Nコード】

N6247F

### 【作者名】

紫音

### 【あらすじ】

2012年9月27日。神は再び人間の前に現れる。

## 序章（前書き）

紫音です。今回エターナル一周年を記念してスピノフ作品を投稿いたします。

これはエターナルの遙か昔の物語で直接的な繋がりはないですが間接的に繋がるつもりなので

g e n u s は少しシリアスホラーチックになってると思うので全く違う感じの2作品をこれからも応援よろしくお願いします。

多分紫音はエターナル関連しか出さないと思いますが気に入っていただければ嬉しい限りです。

それでは紫音の新作をお楽しみ下さい  
長文失礼いたします。

## 序章

これは想像もできない程遙か古の時代の物語。

まだ闇が無かった遙か昔の宇宙は一つの巨大な世界だった。  
創造神デウスは白翼を持つ天使や黒翼を持つ悪魔達と  
共にこの樂園に存在した。

## 序 章

（P r o l o g u e）

『創造書・エターナルサーガ』

それは創造の神デウスが持つと言われる神の書物。  
世界はこの創造書より創られたのだ。

【時】と言う概念を持たないこの世界は  
『神界デウス』と呼ばれ幾度となく破壊、再生が成された。  
それは少しでもより良い世界にする為、  
より良い暮らしにする為に世界は創り変えられていった。

【時】の概念が存在しない【神界デウス】

どれほどの年月が経過したのかは知る術はないが  
創造書に新に書き加えられた物があつた。

それは第3の存在【人間】の創造である。

天使は燃えゆる炎から創造され

また悪魔は塵から創造された。

そして人間は【アニマの器】と呼ばれる物から創造された。

人間は天使や悪魔とは異なる肉体を持ち、物質界へ置かれた。

その世界はデウス界には無い【時】が存在し

人間はこの【時】によって縛りを受ける。

これは創造神デウスの実験的な遊びであり

人間は様々な物を取り付けられた【玩具】なのである。

寿命もその内の一つであるがその他に

憎しみ・怒り・悲しみなどの負のファクターと

喜び・快楽・愛などの正のファクターを

何の脈絡も無く一気に組み込んだ。

これにより人間は常に不安定な状態を免れなくなった。

人間はこれを回避すべく【欲】という

安定要素を自らの手で見出す事に成功する。

予想だにしていなかったデウスは傲慢な存在へと進化した

人間にこれ以降関与しなくなり

文字通り放置され続けられる事になった。

神界へと繋がっていた鎖も断ち切られて

物質界に閉じ込められた人間。

人間には命に限りがある為いつかは滅びるであろうと考えた創造神デウス。しかしその考えは根底より覆された。

様々なファクターを取り付けられた人間はついに自らの種を残す要素を見出だしたのだ。神でさえも予知できなきなかった要素：

それは交わる事…。

プラスを持つ『アーダ』とマイナスをもつ『イーヴァ』

進化を2タイプに分けて互いの成長分子や能力を交じり合わせ新の種として再び誕生させると言うものであった。

この時、初めて個人を刺す名前となるものが生まれた。

そして何世代もの世代を超えて生き延びて来た人間。神の玩具として存在した事や神に見離された事などは昔話やお伽話として今も語り継がれているが世界の80%を超える人間は

神は崇拜すべき高貴で全能なる者として存在している。

## episode 01 死の灰（前書き）

第一話です。

より深くよりシリアスを追求した結果

こんな感じとなりました。

genusは『起源』と言う意味で文字通りエターナルの始まりの辺りを描いた物語です。暫くはこちらも頑張って投稿いたしますので是非見てやって下さい。

episode 01 死の灰

人間の歴史からすれば途方もない時だが  
神にしてみれば一瞬の事なのかも知れない。

神は再び人間の前に姿を現そうとしていた。

それは滅びか救いか…。

西暦2012年9月27日

人類史上最大の出来事となる…。

死の灰  
fallout

- TOKYO -

2012.9.26

pm8:30

ニュースでは様々な事件が流れていた。

殺人やテロ、誘拐など犯罪の合間にある速報が入る。

- 突然ですが臨時ニュースをお伝えします。

最近噂されている水星が地球に衝突する可能性の件で  
国会は次の様に会見を開きました - -

「ほくら美紅、明日面接なんですよ？」

朝早いんだから早く寝なさい」

「...お母さん、地球に水星がぶつかるかも知れないんだって...」

9

立花<sup>たちはな</sup> 美紅

21才 現在就職活動中

「最近急に軌道を変えたって世界中で大騒ぎだからね！。  
しっかしあんたがニュースに釘付けなんてほんと珍しい」

「し...黙っててえ」

「明日遅刻しない様に早く寝るんだよ？」

お母さんお風呂入るから」

「いちいち言わなくていいって…」

「この前【あんな事】があつて  
お母さん、ちゃんと行き先言つてねって  
泣きついてきたのはあんだでしょうが」

あんな事と言うのは先日、 美紅が見た夢についての事だった。

「だってなんか、意味深じゃない？  
世界が終わる夢なんてさ…」

「まあそんなニユースもやってる事だし、  
あんな影響つけたんだよ」

「…そうだと思うけどさあー」

「大体お母さんはずっと家にいるんだから  
あんたが見た夢みたいにいきなりいなくなる事は  
ないんだから安心しなさい」

「だからあ、いなくなるんじゃないって  
消えちゃうんだって…!」

「お母さん、お風呂行つてきまゝす」

「…んもう」

2012.9.26

pm10:59

明日の面接の用意を一通り終える美紅。  
忘れやすい性格の美紅は一通り済ませて  
念の為にもう一度確認する事になっている。  
鞆からまた出して確認しながら入れていく。

「うん、よしオツケー！」

明日着て行く服も…完璧！

目覚ましは…7時に設定してる！

あ！携帯充電しないと！！」

鞆から取り出すと携帯を充電する。

これは美紅の癖なのだろうか…。

携帯を触ると必ずと言っていい程

メール受信を開いてメールが来ていないか確認するのだ。  
1件のメールが届いていた。

「件名」

Re:Re:Re:

「本文」

明日の面接頑張ってね

てか何時に終わんの？  
終わったら電かメして」

「（綯つちからか：別に今返さなくていつか。  
明日終わってから連絡すれば…）」

美紅は携帯を机の上に置くと電気を消してベッドに潜り込んだ。  
真っ暗で何も見えないが美紅は天井を見つめる。

「……今日は見ません様に」

そう心で言うと美紅は瞳を閉じ眠りに着いた。

2012.9.27

am3:18

突然目が覚めた美紅は起き上がるとトイレへと向かう。

「（なんでこんな時間に目さめるかなーあ  
しかもトイレしたくなるし…）」

トイレを済ませるとキッチンへ行き水分を取る。

「ぶはあ」。

あ…またしたくなるとやだからやめとこ…」

冷蔵庫のドアを閉めて自分の部屋へ戻る美紅なのだが  
少し気になったのか自分の向かいの部屋の扉をそつと開ける。

「（お母さん…ちゃんというよね…？）」

美紅の母はすうすうと気持ち良く眠っている。  
安心すると自室へ戻った。

「え！？ もうこんな時間？  
やつばー早く寝ないと…！！」

2012・9・27  
am7:45

予定より45分遅く起きた美紅は急いで仕度を整える。

こう言う焦っている時はいろんな所でボロがでるといつもの。

美紅の場合、鞆に携帯を入れ忘れてしまった。

玄関へと急ぎ素早く靴に足を通す。

するとトイレの中から美紅を呼ぶ声が聞こえ出した。

「美紅ー！ お母さん昨日言った事また

中途半端にしか聞いてなかったでしょー。

あんたも社会人になるんだからしっかりしないと駄目よ  
んとに…お父さんが天国で泣いてるわ」

「もうお母さん！ 話すんだったら

ちゃんとトイレから出てからにしてよね！

…じゃあ行つて来るからねー？」

「忘れ物ないー？ あんたよく携帯充電したまんま忘れる事  
あるんだから今確認しなさい」

「もーそんな時間ないよー！！」

そう言いながら鞆をさつさと見る美紅。  
やはり親はよく気づくものである。

「あ！ 携帯っ！！」

母が見ていないのを確認すると靴を履いたまま部屋へ急ぐ。

「ほら言ったでしょー。だから早く寝ないからそんな事になるんでしょうがー」

美紅は携帯を入れるとまた玄関へ戻る。

そして玄関の扉を勢いよく開けて駅へと急ぐ。

「やあばーい！ やばいよー！！ 完全ちこくだあー」

- 駅のホーム -

2012.9.27

am8:17

家から駅まではそう遠くないが全力疾走した事によりこのままでいけば間に合いそうだとホッと一息を入れる。ホームで電車が来るのを待つ美紅は尽き果てたかの様にその場に腰を落とす。

「綵つちに昨日のメール返しとくか…」

メール文を打ち返信する。

「はあ……………」。  
「あれえ…？ 遅いなあ…」

ホームの時計を見ると40分が過ぎていた。  
それに少し焦りと苛立ちを忍ばせながら  
線路側を覗き電車が来ないか確認する。

「もう…なんで大切な日にそうなっちゃうかなあ…!!」

時刻は午前9時になった。

するとホームにアナウンスが流れる。

それは事故か何かは言わなかったがまだ遅れるのだという。

「ちよつと！ もう信じらんない!!」

美紅は電話で事情があつて遅れると告げた。  
しかし何故これほどまで遅れるのだろうか…。  
大きく溜め息を吐き零すとベンチに腰かけた。

- 車内 -

2012.9.27

am9:23

ご乗車の皆様にお詫びを申し上げます

本日:

繰り返し流されるアナウンスに軽く文句を吐きつつ  
やっと乗る事が出来たとどこかで安心するのだった。

「(遅れたけど……面接……頑張るぞ)」

車内では噂のニュースで持ち切りだった。

普通の会話を楽しむカップルも隣の人の話を  
耳で拾った途端、話は擦り変わる。

「昨日のニュース見た？」

思わず神経を耳に集中してしまう美紅。

聞こうとはしていないが2人の話が耳に流れてくる。

「ああ。水星が地球に向かって来ているんだろ？」

噂じゃ近々肉眼でも見れるって事らしいじゃないか」

「ほんと？」

「しかもいきなり軌道変えたんだってさ」

「なんか奇妙な話だねそれ…」

「まるで誰かがグイッと曲げたみたいな感じだよな？」

「まあそんな事できるとしたら神様ぐらいだろね」

「（神様がもしいるんなら…」

そんな事絶対止めてくれるはずだもんね…）」

- ファミレス -

2012.9.27

pm3:34

面接が終わると綵と待ち合わせの約束をしている美紅。

面接は午前中に終わり、それから綵と行動を共にしていた。

シヨッピングやカラオケなどを楽しんだ後

お腹が空いたということでファミレスに寄る。食事をしながら2人は話題の水星について話し始めた。

「ねえ美紅っち、 昨日のニュース見た？」

「うん。 なんかさーやばくない？」

「てかさ、 水星つてぶつかるやばいの？」

「やばいんじゃないの？」

世界で話題になるぐらいなんだからさ」

「明日もし地球なくなるんだったらなにしようかなあ……」

「海外旅行ちよー行くとか？」

「いいねいいね ナンパされて一夜だけの関係を…  
あたし外人と付き合ってみたいな」

「綵っちは面食いだからね。  
でもやっぱ家にいるかもあたし」

「えーそれじゃつまんないじゃーん。  
あたしスキューバーもしてみたーい  
インストラクターの人もちよーイケメンでさあ」

「綵っち…男の事ばっかだよな」

「うるさあいつ、 誰かさんみたいに彼氏いないのあたしは」

「……別れたよ」

「…え？ そうなの！？ いつー！！？」

「もう1カ月なるかな…」

「……なんか……ごめん」

「ん、別に気にしてないし…」

「気にしてるじゃあん！ ほんとごめん。  
ね？ ごめんってばあ」

「はいはい。ゆるしますうー」

そんな他愛もない会話が続く中、美紅はふと外を眺めた。  
まだ10月にもなっていないというのに  
突然雪が降りだしたのだ。  
気温が低いせいもあってか気づかなかったが  
よく考えればおかしかった。

「綵つち…雪降ってる…」

「ええ？ まだ9月だよ？」

「見てよ！ ほら」

と2人が窓ガラスに顔を近づけた時だった。

いきなり今まで経験した事もない大きな爆発音と地震が美紅達を襲った。

すぐテーブルに身を潜める2人。

人が悲鳴を上げる音、食器類が割れる音や

建物が次々と崩壊するその轟音が一気に耳に流し込まれ

あまりの恐怖と不安に胸がちぎれそうに痛む。

そして泣きながら綯と抱き合い声を掛け合う2人。

地震の揺れは一時的なものだった。

「美紅っち…大丈夫？」

「う、うん。テーブルに隠れてよかったね…」

美紅達がいる店は崩壊していたが

幸いにも2人は無事だった。

しかしいろんなものがテーブルの上に重なり

2人は身動きが取れない状況だった。

気持ちが落ち着いて来た所にはっと

美紅は母の事を思い出した。

「そうだ…お母さん！！ 綯っち！

そこから手を伸ばしてあたしの鞆とれない？」

「待つて。 ちょっとやってみる」

「綯っち…これってさ…地震じゃないよね…」

「例の水星？」

「じゃないのかなあ……」

「でも、もし水星がぶつかってきたんだったら……  
あつたあつた……はい！  
とりあえずよかったじゃん」

「なんでよかったんだよ」

「だってぶつかっても地球はなくなかったじゃん？  
もう心配ないっしょ」

「あー、そっかあ」

電話帳を開いて自宅に電話する美紅。

しかし繋がらない。

恐らく皆同じ事を考えて一斉に電話をかけているので  
かからないのだろうか……。

とりあえずこの場所から早く出たいと美紅は  
慎重にと瓦礫と瓦礫の隙間から顔を出した。

「美紅っち、どんな感じ？」

「……………」

言葉が出て来なかった。

美紅が見た光景は日常生活では決して有り得ない光景。

映画のワンシーンに自分がいるという程度しか理解が出来ない。

本当に今見ている景色が現実とわかったのは

倒れているいくつもの死体や重傷の人達。

右腕が瓦礫に挟まりちぎれてしまった男性。

大火傷を負って顔が水膨れのように腫れ上がった女性。

それを目の当たりにすると心臓が速く脈打ち

手足から震えが止まらなくなる。

こんな悪夢の様な日がまさか現実になろうとは

微塵も感じていなかった美紅。

涙が止まらなかった。

2012.9.27

pm5:02

救助隊が現れ美紅達は救助された。

どこも怪我はない2人だがとりあえずという事で  
車に乗る。

思わず現状が知りたかった美紅は救助の人に  
話しかける。

「…水星が衝突したんですか？」

「あれは…水星じゃなかったんだよ」

「え？」

水星じゃない…。

とするならば一体何なのだろうか…。  
続けて質問をする。

「空を見ればわかると思うけど…」

「空…？」

窓から空を眺めて見ると雪がハラハラと舞ってるのが見えた。  
しかし曇り空で暗い為よくわからなかった。

「でもなんか変ですよね…」

「地球はもうおしまいだな…」

2012・9・27

pm5:35

車が急に止まった。

美紅と話してた男が気になって呼びかける。

「おい、何で急に止まったんだよ」

しかし返事はない…。

「どうかしたんですか？」

「ちょっと前見てくるから」

「あ……はい」

男はドアを開けて外から運転席へ向かった。  
救助されてから何故かずっと黙ってる綯。  
気になって話しかけてみる事にした。

「この先どうなっちゃうんだろうね…あたしたち」

「……………美紅」

「ん、なに？」

「み、美紅……………これ…」

「うん？」

綯の様子は何故かおかしかった。

どこを指差す訳でも場所を言う訳でも無く  
ただ『これ』と言う言葉を美紅に伝える。

「これって？ どれ？」

「美紅……………あたし達…友達だよね…。  
親友だよね？」

「何よ急に……………当たり前じゃん！！  
あたし達幼なじみでしょ」

「だったら…だったらさあ……………美紅…」

「早くいいなって」

「美紅…あ、あたしの足元…見て…」

足元に何かあるのか？

それに綵の怯え方は普通じゃない。

足元を見るぐらい見てやるかと

身を屈め綵の膝を持って足元を覗いて見た。

「ん…？　なにが？　別に何も無いじゃん

ねえ綵っち、　なに……

き、　き、　き、　き…

きゃ　あああああ！……！……！

綵の顔面が急に異常なまでに腫れ上がっていた。  
よく見れば片足だけ指先から  
ふくらはぎにかけて膨れ上がっている。  
ゼリーののようにプニョプニョした質感が  
容易に想像できる程

綵の足や顔が変形している。  
綵は泣きながら美紅に訴えかける。

「美紅……美紅あたし……  
どうなっちゃったの……？」

「あ……あ、あ……あ、ああ……」

言葉にしたくても力が出なかった。  
普段気づく事さえもない声を発する筋肉が  
恐怖で麻痺しているみたいだった。  
美紅は少しずつ車のドアへと手を伸ばす。

「……みくう……あた……し……たちし……  
ゆう……言……じゃ……ん……」

「あ、あやあ……ご、ごめえん……！！！！！！」

勢いよくドアを開け外へ飛び出した美紅は  
さっきの救助隊の人を見つけ、近寄って行った。

不気味に変化した事を伝える為に…。

しかし本心は一秒でも早くここから逃げ出したい気持ちでいっぱいになっている美紅。

男の背中を叩いて服を引っ張ると…今出せる最大限の力を振り絞って話しかけた。

「あ…ややが…あや…が」

美紅が男を振り返らせると

男は身動き一つ取ること無く地面に倒れた。

綵と同じくこの男も所々が膨張しているのだった。

「きゃああ！！　な、　なん…で…」

運転席に座っている運転手もベビーカーの赤ちゃんも

美紅以外の周辺の人間は皆綵と同じ様に変形していた。

そしてさらに気づいた事があった。

美紅は勘違いしていたのだ。

雪だと思って気にならなかったが今よく見ると違っていた。それに触れても冷たくはない。

これは灰の様な物体だった。

恐らくこの灰が人間に変異をもたらすに違いないと思った美紅。

だっ たら疑問が残る…。  
自分は触れているのに何の変化もないのは  
何故なのだろうか…。

2 0 1 2 . 9 . 2 7  
p m 5 : 5 9

美紅は宛ても無く走る。  
周りは不気味な姿をした人間でいっぱいだった。  
どこに行ってもどこに隠れても化け物だらけ。  
精も根も尽き果てた美紅は次第に足が止まる。

「おねがい…夢なら覚めて…」

泣きながら力尽きた様に倒れ込んだ美紅は涙を流しながら  
目の前のボロボロの人形に手を伸ばす。  
灰がひらりひらりと落ちて来る。  
そして辺りを静かに冷たい風が舞う。  
横に倒れたまま起き上がる気力も失った美紅。  
灰を払って人形を胸に抱く。  
唯一まともに見えるのはこの人形だけ。

「死にたい…もう…いや…」

頬を伝う絶望の涙。

こうなるまでに起こった出来事が嘘の様に幸せを感じる。

美紅の身体が灰で埋まっていく。

しかし振り払う事は一切しない。

瞼がゆっくり閉じていこうとする中。

背中から音がした。

反射的に振り向くが動作はゆったりとしていた。

「綺麗…真っ白」

美紅の瞳に映ったものは…

「立花…美紅だな…」

「…なん…で？ ……あたしのなま…え」

「あんたを探してた…」

イー  
ヴ  
ア  
……  
」

## episode 02 昇化

『イーヴア』

美紅を確かにそう呼んだ。

自分の名前も苗字も言い当てたのに

イーヴアとはどういう事なのだろうか…。

｝ 昇化 ｝  
p r o m o t i o n

2012.9.27  
pm6:42

まともに話せる相手に出会えた事で気力が少しずつ戻ってきた。  
目を擦って涙を拭き終わると再び起き上がる。

「あの…だ、誰ですか？

どうしてあたしの名前知ってるんです？」

男は腕を組んだまま黙り込んでしまった。

見るからに怪しい感じを漂わせるこの男。  
明らかに日本人ではなかったが話す言語は日本語であった。

「あんたを連れに来たんだ」

「あたし？」

「ここはもうじき、魔物でいっぱいになる  
早く離れた方がいい……」

「ま…もの？」

美紅の問いに男は腰から銃を取り出すと  
数発、近くの人間に撃ち込んだ。  
突然の事と銃の鳴り響く音に見を縮めた。

「こいつらの事だよ」

「な、なんで銃なんか持ってるんですか!？」

「イーヴァ…いいから早く準備しろ」

「もう…わけわかんないよー!!」

「……………」

泣き叫ぶ美紅を見るとまた黙り込んだ男。  
静かに銃をしまつと目を閉じて美紅が泣き止むのを待った。  
銀色の長髪のスラッとした男。  
彼は一体何者なのだろうか。

「…わかりました。 行きますよ」

「……ついて来い」

一言零すとどこかに向かつて歩いて行く。  
美紅は警戒しながら少し離れてついて行った。

2012.9.27  
pm7:00

そう言えばと美紅は気づいた事があった。  
この男も灰に触れても変化は見られなかった。  
美紅と同じなんらかの【性質】を持っているらしい。  
気になったら聞きたくなる性格の美紅は躊躇いもなく問う。

「あのう……」

「…今はジェラスと名乗っている」

「は、はあ。それでジェラスさんは何で灰に触れても…その…変化しないんですか？」

「あんたの…加護の力だ」

「あ…えつと…よくわかりません」

「はあ…いいから黙ってついて来るんだ」

「あ……はい」

瓦礫の山を避けながらどんどん先へ進む  
ジェラスの後についていく美紅。

彼は全くこちらを振り返る事はなくただひたすら歩く。  
しかしどこへ向かっているのか検討もつかない。

崩壊したビルの瓦礫の上にポンツと身軽に飛び乗るジェラス。  
地上から5メートル以上はあるそのビルに

まるで当たり前前の様にやってみせたのだ。

もちろん美紅にそんな真似はできない。

「（す、すごー…）」

「何してる、早く来い」

「無理って言うか…出来る訳ないじゃないですか」

「何故だ…」

「何故って…。普通そんな距離飛べませんって!!」

するとまた戻って来ると美紅を肩に乗せまた身軽に飛ぶ。

「ちょ…っと！ 降…ろしてー!!」

「ほら…」

捨てる様にして美紅を地面に置いた。

ジェラスには気遣う気持ちがないのだろうか…。

「い…たあゝい!! もう最低」

「…こつちだ」

「もう…!!!!」

ジェラスはこの周辺が見渡せる場所を探していたらしい。  
少し遅れて美紅もその場所へとやって来た。

2012.9.27

pm7:30

「と、と東京がめっちゃめっちゃ…」

「見ろ、始まる…」

すると周辺から地の底を這う様な呻き声と風船を絞った様な音がそこから中から聞こえ出した。気味の悪い耳を塞ぎたくなる嫌な声だ。

「あの…これからどうなるんでしょうか」

「イーヴァ、あんたも【アレ】と戦う日がいずれ来る」

「あ、あた…あたし？」

む、むむむりむりむり！ 無理ですー！

「何故だ…？」

「な、なぜ…って、そりゃあ怖いし…  
てか銃だって握った事もないのに」

「心配はいらん。戦闘なら俺が教える事になっている。あんたが早めに覚醒してくれればいいが…」

「そんな心配なんてしてません！

大体、人を殺すなんてできません！！」

「はあ。あんた本当にイーヴァなのか？」

「だーからあ！そのイーヴァって誰なんですか！？あたしの名前は立花美紅ってさっき貴方も」

「イーヴァは誰かではない…。まさか転生が失敗したのか？」

「は？て、てんせい？」

ジェラスはまた黙り込んでしまった。

「あの、地球はどうなっちゃったんですか？

綵は変な…化け物になっちゃうし…」

「……………」

「綵…ごめんね…あたし最低だよ…親友だったのに…いつもずっと一緒だったのにね…」

助けてあげられなくて…ごめん…」

美紅は綵が目の前にいるかの様に話し始める。  
綵とのこれまでの思い出が甦って来る。  
不思議なものでいくら喧嘩をしても  
思い出す部分は楽しい部分であつた。  
ジェラスは不思議そうに美紅の顔を見つめる。  
何か言葉が今にも出てきそうな表情だ。

「な…なんですか…」

「その……綵とやらは大切な仲間なのか？」

「な、仲間…つてか親友…」

「だったら助ければいい…今ならまだ間に合う」

「ほんとですか！？ でも助けるってどうやって…」

「はあ。 あんた…さっきの事と言い  
本当に何もかも忘れたんだな…」

だから100サイクルは無理だって言っただ…」

聞き慣れない単位が出て来た。  
100サイクル…。

考えるより先に口が前に出る美紅はもちろん  
ジェラスに疑問をぶつける。

「忘れたって…知らないですよ!!」

大体その100サイクルって何ですか？

どこの国の単位ですか？

聞いた事ないですよサイクルなんて」

「もういい…。じゃあ今回は俺がやるから」

「…はあそうですか」

「連れてくるからここで待ってる」

「はい、お願いします。」

えっと特徴は…」

「もうわかってるから」

「え？」

そう言うともた身軽に飛び降り、走って行ったジェラス。

驚く事に物凄いスピードで駆け抜けて行ったのである。

美紅の目では捉えきれない、そうまるで消えたみたいだった。

「あの人…絶対人間じゃない…」

2012.9.27  
pm9:22

暫くすると綵を抱えたジェラスが  
いきなり下から上がって来た。

「美紅っ!!」

「綵っ! ごめんねっ! ほんとごめん」

綵は既に元通りとなっていた。

ジェラスは一体どうやって彼女を治したのだろう。  
しかし今は素直に再会を喜ばずにはいらなかった。

「…綵とやら」

「え、 あ、 あたしですかあ?」

「あんたも俺達と来るんだったら  
戦術を学んでもらう事になるが…」

「え、 綵も!?」

「見た所、 長年イーヴァと時を過ごした事で  
霊力が増した様だから少し叩き込めば  
霊術を使いこなせるようになるだろ」

「は、はあ

（ねえ…何の話？）」

「（さあ意味不明…）」

「では共に来ると言う事だな？」

「あ…は、はい！　お願いします」

「少し待ってろ…」

するとジェラスはビルから飛び降りてどこかへ消えて行った。

「ね、どうやって治してもらったの？」

「うーん、それが気を失ってたみたいなんだああたし…」

「そっか…」

「てかさてかさてかさ、

あのジェラスって人ちよーかつこよくない？？」

「えー、あんな無愛想なのがいいの？」

「ばーか、それがいいんじゃない？」

「でも変な人だよ？」

あたしの事イーヴァとか何とかって…」

「なにー？ イーヴァって」

「しらない」

「ねねねえ、あの人彼女いるのかなあ？

何才なのかなあ　　ねえ美紅う」

「知らないってあたしもついさっき初めて会ったんだから」

「可能性ありそう？　あたし」

「なに…なんの可能性？」

「あ！　聞いてなかったなあ！！

んもう…美紅はいつも中途にしか聞かないんだからあ」

「ご、ごめん！　いろいろあって疲れてるんだって…」

「うん…疲れるよね…

こんなのマジ映画でしか見た事なかったから…」

話が萎んできた所でジェラスがタイミングよく戻ってきた。  
両手に黒いアタッシュケースが見えた。

「待たせたな…」

「あ、ぜ、全然大丈夫ですからあ！」

ジェラスが一つ目のアタッシューケースを開けた。  
中が気になって2人はジェラスの  
背中越しからそつと中を覗き込んだ。

「（なにあれ…）」

「（…なんだろ）」

ジェラスは中からある金属を2つ取り出すと2人に渡した。

「え、あたしにもくれるんですかあ！！  
ありがとうございますう

大切にしますう」

「…飲め」

「……え、えっ！？」

ジェラスから渡された物は銀色の  
小さなイヤリングの様な物だった。  
丸い玉にチェーンがついた感じの物体…  
これを飲み込めと言う。

「飲めって…なんなんですかこれ」

「それが昇化を手伝ってくれる」

「し、消化を手伝うって…？」

「いいから飲み込むんだ」

2人は顔を見合わせながらせーので飲み込む事にした。  
チエーンのような物を摘んで口の前まで持って来ると…。

「美紅いい？」

「うん…せ」

「の」

口を開けて一気に飲み込んだ2人。

喉元を過ぎ食道を通るのが感覚で伝わって来る。

「美紅…どう？」

「ん、別に…！？ ……あ…か…かはっ」

「み、みく！？ ……か…あ…あっ…い…」

2人に異変が起きた。

胃の辺りが激しく痛む。

熱くそして激しい頭痛で声も出せない。

息が出来なくなりやがて2人はその場に倒れ込んだ……

**e p i s o d e   0 3   離脱（前書き）**

g e n u s は小だしにするつもりなので。

## episode 03 離脱

どれくらい経っただろうか。

美紅と綵が意識を失って数時間：

彼女達の身に一体何が起こったのだろう。

s e p a r a t i o n  
） 離 脱 ）

2012.9.28  
am1:01

突然2人の目が開いた。

目覚めたと言うよりは悪夢を見て飛び起きた様な感じだ。  
無言のままムクツと立ち上がると要約口にする。

「どうやらうまく昇化できた様なな」

「美紅大丈夫？」

「う、 うん… 綵… なんか景色… 変… じゃない？」

「あ、 美紅もそう思った？」

「なんか青い粒が見えるあたし…」

「うん、 あほら、 そこに見えるよね」

「……それは靈気だ。」

「まさかそこから説明しないと駄目なのか…」

「靈気…」

「み、 み、 みくみくみく！！  
上見てうえっ！！」

「な、 なに？ うえ？」

綵に言われた通り上に目を向けると  
想像以上の風景がそこにはあった。

遙か上空に地球を覆いそうな程巨大な物体が見えた。  
ここからだとほんの一部しか見る事は出来ないが  
それでも何という巨大な物体であろうか。

「あんなのさっきまで無かったよね？」

「な、 なんなんですかあれは…」

「あれは…神界だ。 【神界デウス】」

「しんかい？」

「創造神デウスがいる世界だ。

ここで言う……天国の様なものだ」

「神様？」

「…なのかなあ」

「見える理由は昇化し、 霊力が解放されたからだ。  
あんた達は非物質的な物を見てるんだ」

「（ひぶつしつってなに美紅…）」

「（んゝ簡単に言うて見えない物が  
見える様になったって事じゃないかなあ…）」

「デウスはアードとイーヴアを探している。  
恐らくその目的は俺達【エテリア】と  
人間の【器】の回収と消滅させる事…  
器がなければ再生されないからな」

「（見えないもの？ 例えば？）」

「（……幽霊とか…）」

「（ゆ、 ゆうれい……ええゝなんか怖いゝ）」

「（でも、幽霊って見えなかったから怖いだけで見えてしまえばそんなでもないよきっと）」

「今の俺達にデウスの世界に存在できる霊力はないがイーヴァ、あんたが覚醒したら十分に維持できるはずだ。あんた達の力を借りて【アレ】を奪うんだ。そうすればデウスに怯えなくて済む。その為にも早くもう一人のアーダを見つけないとな…」

「（でもどんな風に見えるんだろ…。首がないとかよくテレビで見るああいうのだったらやだなあ…）」

「…おい、聞いてたか？」

「え？ あ、は、はあい！！！」

「はあ。とりあえずここにいるとすぐに見つかるから【ラピュラリス】まで急ぐぞ」

「は、はあいー！！！」

ビルから2人を降ろすとジェラスはアタッシュケースを手にもた歩き出した。2人はその後ろについて行く。

2012.9.28  
am2:15

銀色の長髪をなびかせながらどこかへと誘うジェラス。  
綵は彼の事が知りたくてたまらなかった。  
後ろ姿をじつと眺めていた彼女は  
思わずこんな質問を切り出した。

「あのう…ジェラスさん？」

「……………なんだ」

「ジェラスさんって何才なんですかあ？」

「……………大体でいいなら言うが…？」

「だ、大体……………いくつなんですかあ？」

「……………8サイクルと5兆6千億……………」

「……………あ、え、えと、ああの……………」

「すまん……………大体しからん……………」

「あ、い、いええ！！　ぜーんぜん！  
あは…あはははっ……………」

「ジェラスさん…そのサイクルってなんなんですか？」

「……………1サイクルと言うのは  
星が誕生して滅ぶまでの期間だ」

「へ？」

「と、言うことは……………」

「少なくとも8回再生と消滅を繰り返してる」

「す、凄すぎてわかんなくなってきた…」

「ね……………」

「地球のあらゆる文明はある一定以上で  
成長が止まる様に決まってるんだ」

「何で決まってるんですか？」

「創造神がそう決めたんだ。  
エターナルサーガを使っただけ…」

「は、はあ……………」

「（ねね美紅っち、エターなんとかって？　なに？）」

「（あたしが知る訳ないじゃん！！）」

「ちなみに、この宇宙の歴史は約400サイクル。地球は次で17サイクル目に入るらしい。

あと3年程で人間の文明が終わりを迎え…

1万年もすればまた人間が誕生し、文明を築くだろうな」

「じゃあ人間の歴史つてずっと繰り返されてるって事なんですね…」

「そうだな…」

「（な〜に、美紅…あんた理解できたの…？）」

「（まあなんとなく…）」

2012.9.28

am4:31

かなりの距離を歩いて来た3人。  
気づけばもうすぐ夜明けであった。  
へとへとで途中で休憩したいと

2人はジェラスに提案するものの  
死ぬか生きるかの2択を突き付けられては  
言葉を返す事はできなかった。  
そんなこんなでやつとの事到着したのだが  
特に周りには何もなかった。

「ここですか？」

「……正確に言えばこの場所じゃない。  
ここから先はセパレーションしてしか進めん」

「セパ…レーション……」

「肉体を捨てるんだ。やり方は教える」

「ええ…幽霊なっちゃうのあたし……」

「いいから…もう時間がない」

「綵、とりあえず頑張ろ？　ね？」

「う、うん」

「これを見る」

ジェラスは円いわつかを2人に見せた。

「この円の内側に入るイメージをするんだ」

「（イメージ……）」

暫くすると美紅の頭からもう一人の

美紅がまるでヘドロの様に少しずつ出て来た。

青白い光を放つ美紅の光体は肉体が

自分に吸収されると光が落ち着いて来る。

「流石だな。 そう、 それがセパレーションだ」

「み、 美紅ゝあたし無理ゝできないよゝ」

「綵、 諦めないでよ！ ほらもいつかいやって！」

しかし何度試しても綵にはできなかった。

「駄目だ。 もう時間がない」

「ち、 ちょっと！！」

まさか綵を置いて行くんじゃないよね！？

「わかっている…早く肩に触れろ」

「……じつ……？」

するとジェラスと綵は同時にセパレーションし光体へと変わった。  
すぐにジェラスは両手に力を込める。  
彼の身体から水色のもやが見え出した。  
そしてそのもやが掌へ収束していき目の前に  
広がると光の渦に変わった。

「早く入れ」

美紅と綵はお互いの手を絡ませ目を粒りながら飛び込む。  
ジェラスが最後に入ると光の渦は縮小していき  
やがて消えていった…。

## episode 04 ラピュリス

「…着いたぞ」

空間から抜けるとそこは別世界だった…。

ラピュリス  
L a p u r e l i s

美紅と綵は我が目を疑った。

何故ならそこには何もなかったからだ。

【無】という言葉がこれ程似合う場所が他にあっただろうか…。

どこを見ても暗き闇が広がる世界だった。

美紅も綵も口から言葉が出ない。

と言うよりも思い付かないのだ。

明かりを消すそれとは全く意味が違う。

景色も音も何も存在しない世界

ラピュラリス…。

「…ここがラピュラリスですか？」

「…そうだ」

「あ、あのおう。 な、 なにもみ、  
えないです…けどお……」

「何故だ…？」

「な、 なぜ…って…」

「く、 暗いからに決まってるじゃないですかあ！！  
や、 やだなあもお…あははは…」

「…何故暗い？」

「え？」

「何故暗いかと聞いているんだ」

「ちよつとジェラスさん!!  
いい加減にしてください!!!」

「じ、じゃあジェラスさんわあ  
一体何が見えてるんですかあ？」

「…草原だ」

「草原？」

ジェラスは草原が見えているらしい。  
草原どこかお互いの顔も見えない  
この場所の何処に草原などがあるのだろうか…。

だが次の瞬間…。

「あ!!」

「うわあ!!」

2人は声を揃えて驚いた。  
なんと今まで無だったこの場所がいきなり  
緑生い茂る草原へと変わったのである。

「なんで…さっきまで…」

「そ、草原が見える…」

するとジェラスは少し言いにくそうに口を動かした。

「す、すまん…言い忘れた」

「え？ 言い忘れたって？」

美紅が即座に切り返す。

「当たり前的事で考えもしなかった…。  
あんた達【時】に縛られているんだったな」

「え、えとお、言ってる意味があ…あはは…」

「俺は【時】の呪縛から解放された世界の人間だから  
気づかなかったんだ…すまん」

「は、はあ…。それで何を言い忘れたんですか？」

「…【時】の無い世界はイメージで  
成り立っている世界なんだ。  
イメージしなければ何も見えない」

「イメージ…ですかあ…」

「さつきあんた達が見た草原は俺のイメージ。  
草原と言うキーワードであんた達が  
想像したから見えただ」

「そう言えば聞いた瞬間に…」

「だから2人とも俺が見える草原とは  
違う草原が見えているはずだ」

「ジェラスさんじゃあイメージすれば…  
例えば砂漠とかになっ…」

そう美紅が話し終える前に辺りは砂漠となっていた。

「な、 なっ ちゃ う ん ですね…」

「だが気をつけろ、 イメージは霊力の源。  
想像は霊力を消費するんだ」

「霊力を…」

「あまり景色で遊んでいると  
そんな少ない霊力しか持っていない  
あんた達ならあっという間に疲労するから」

「みいゝくゝ」

どつやら遊びすぎた者がいたようだ。

「あ、 綵くち、 ちょっと大丈夫!？」

「…そう、 そうなるから気をつけるんだ」

「は、 はい…」

「はい…。 くああ目が回るう…」

さらにジェラスは付け加えた。

「あと、 【時】が無い世界は文字通り時間が存在しない。  
寿命が100年未満のあんた達

【時の住人】は年を取らない。

俺には実感はないがあんた達なら理解できるはずだ」

「ええ!？ じゃあ…」

「老いて死ぬ事は永遠にない」

「…み、 美紅く!! やったじゃくん  
あたし達21才を永遠に保ち続けられるんだあ」

「う、 うん…よかったね。 綵」

「えー嬉しくないのお？」

「うーん…なんか…怖くない？」

「ちなみに言っておくが…」。

【時の世界】、つまり地球に戻ると時間は存在するからまた縛りを受けるんだからな。

「応言しておく」

「はい…。あの、それでこれからどうするんですか？」

「とりあえず、【マリスナディア】に会ったが…」。

その前にまずあんた達が霊力を自分の意思でコントロールできなければ話にもならん…」

「霊力をコントロール…」

「だからまずはここで霊力のコントロールを身につけてもらおう」

「それでどうやるんですか？」

「はあ…。まあ待て…」。

さっきみたいに勝手にイメージされて倒れられては効率が悪い」

「す、すいませえーん!!」

「だからイメージを統一させてもらおう」

話が終わる直後に景色が変わった。  
それは2人が大変馴染みのある景色だった。

「あんた達の記憶を探ったところ…。  
訓練する場所はどうやらこれが相応しい様だな…」

「相応しいってか…」

「ふ、ふつうに…学校…なんだけどお…」

「…来い」

2人の前にあるのはまさに2人が通っていた  
学校そのものだった。

見覚えのある校舎など当時の記憶が甦ってくる。  
門からグラウンドへと入り廊下を渡って教室へと向かう。

「でも…何で中学校？」

「あんた達の記憶の中で強い結び付きがあったからだ」

「綵あ中学校で、 なにかあったっけ？」

「さあ…ぜんっぜん覚えてないからさあ」

「陸斗と言う男が関係している様だな」

「りくと……あー!」

「なにになに〜美紅っち」

「駄目……い、言わない……」

「な、なにそれ……ちよつとどーゆー事なのよー!」

「だめだめ! 絶対言わない」

「ちよつと美紅ー! 親友だよね!?  
隠し事なんて許さないんだからあー!」

「あんたに内緒で付き合ってたそうだ」

「な!?!」

「みい〜く〜! それほんとなの〜!」

「……嘘も何もない。記憶だからな」

「ちよつと!! ジェラスさんっ!!!!」

「みい〜く〜!!!!」

緑の冷たい流し目が美紅に突き刺さる。

「だ、だってさあ、もう何年も前の話じゃん!」

「ひどおい…！！ 親友だと思ってたのに…」

「…中に入れ」

教室の中に入るとまたさらに驚く事があった。  
机の中には教科書などがちゃんと入っていた。  
通学用鞆や体操服、 ほうきや黒板消しなど  
事細かに再現されていたのだ。  
これはまさにタイムスリップした様だった。

「すごい…」

「じゃあ今から訓練を行う。  
適当に座ってくれ」

「うあゝなつかしいなあ」

「あたしい朝いつも寝てたなあ…。  
高橋にチヨーク投げられてさあ！」

「おい、 始めるから…」

「あ、 は、 はい！！ …すみません」

いよいよ靈力コントロールの訓練がはじまった…。



episode 05 霊力（前書き）

涙あり笑いありたまにシリアスホラーのETERNAL SAGA  
genus . これからもよろしく

## episode 05 靈力

つい夢中になって時間を忘れてしまった…。

こんな経験はないだろうか。

好きな事や夢中になっている事をしている時、

人は時間を忘れる事がある。

もしかしたら人間はその間…

【時の世界】から逸脱しているのかも知れない。

s o u l e n a g y  
） 靈 力 ）

- ラピュラリス -

教室で靈力について聞いている美紅と綵。

まるで授業の様に話が進んでいるが

内容はその雰囲気合わない

今まで聞いた事もない靈力について。

さっきまでふざけあったり景色に懐かしむ2人であったが

真剣にジェラスの話をその耳に入れる。

「…霊力は3つある…」。

物質化、 浮遊、 イメージ。

どんな霊術にも必ずこの3つの霊力が必要なんだ」

「はい」

「（ぶつしつかに…イメージと浮遊）」

「霊力はイメージ、 つまり想像する力がまず基本、次にそのイメージを物質化させる…」

目の前に想像した物を創り上げる力だ

そしてそれを操作する力、 浮遊。

この一連の流れで霊術を扱う基本が生まれる」

「…はい」

「（えと、 想像して物質がふゆう…」

え、 想像して浮遊させたものが物質…」

ちがうちがう、 浮遊した物質が想像力の基本…」

あー！ わけわかんない！」

「慣れればこんな事が出来るようになる」

「…？」

ジェラスは無造作に左手を2人の前に出して

力を入れ、 掌を上へ向けると手が青く輝き出した。

「光った…」

「綺麗…」

「この光は霊気…あんだ達も見た  
あの青い粒を集めたのがこれだ。  
この状態がイメージ、そして…」

掌に再び力を込めると青い光が球となった。

「あ、 ボールみたいになっちゃった…」

「…これが物質化だ」

「ちよつと触ってみてもいいですかあ？」

「今のおんだ達には触れん」

「え…ちよつといいですかあ」

綵はゆつくりとその球に手を近づけた。  
しかし綵の手はそのまますり抜けてしまった。

「ほんとだあ…触れな〜い」

「…最後は浮遊。  
きつとこれが一番難しいだろうな」

また力を込めるジェラス。

段々興味が出て来た2人は次はどうなるのか  
楽しそうにまた真剣に見つめる。

「う、 浮いた…」

「これが浮遊だ」

「なんかぁ手品見てるみたいだよねえ」

「これを素早く出来るようになると…」

そう言いながら一度靈気を元に戻すと、  
また左手を今度は横のドアに向けた。

そして掌から先程の青い球がドア目掛けて  
勢いよく飛び出したのだ。

命中したドアは穴が空いた。

「す、 すこっ」

「あ、 ああ穴…空いちゃ…た」

「これが霊力の基本だ。わかったか？」

「あんなすごい事ができるんですか？ あたし達」

「出来るか出来ないじゃない…やるんだ」

「は、はあ…」

「美紅っち、頑張ろうね」

地球からこの地へ来てからどれ程の時が経ったのだろう。  
この世界にいる限り知りようがない事だが

美紅と綵は失敗を何度も繰り返し続け

既に2000回を超えた。

イメージと物質化までは2人共容易にクリア出来たが  
ジェラスが言った通り【浮遊】でつまづいていた。

あっさりと進んで来たぶん、相当難しく感じるようだ。

「あ、またダメだ…」

「ああもうやだやだぁー」

「……………」

美紅は掌に意識を集中させ霊気を作ると  
それを物質化させて球を作る。

ここまでは間違う事なく出来る。

失敗してか2人共既に当たり前の様に  
感覚で出来る様になっていた。

「だめだ…なんかいやつてもダメだよ…」

「ジェラスさぁん、 本当にあたし達って  
霊力使える様になるんですかぁ…。  
出来ないのかなぁあたいしい…」

「……素質の問題じゃない。  
教えるのは簡単だが…それでは意味がない。  
もう一度考えろ。 霊力の基本を…」

「霊力の基本…」

「うーん…霊力の基本わぁ…」

2人はジェラスの話を思い返した。  
霊力とはイメージ、 想像力が必要不可欠。  
物質化にしても浮遊にしてもイメージする事が基本。  
それを踏まえた上でもう一度試してみた。

すると…。

「で、出来た…できたああ!!」

綵の掌の光の球は見事に浮いていた。

苦労しただけあつて成功すると

心から溢れる程の喜びが込み上げてきた。

瞳に軽く涙を浮かべながら美紅に報告する。

また美紅も成功していた。

「…あんた達は何故そこまで浮遊に手間取ったのか  
わかるか？」

「基本はイメージなんですよね」

「こそ！ 想像力」

「そうだ。だがそれだけが出来なかった理由ではない」

「え、何ですか？」

「あんた達は何回も失敗したせいで

自分には出来ないのかと思い始めた。

何度も言うが…霊力はイメージする事が大切なんだ。

【出来ない】と思ってる限りできん」

「なるほど…なんかわかった気がします!!」

「ね！ 霊力には自信も大事だよねえ」

自分を信じる事…。

人は失敗が続くとすぐに自分を見失う。

そして他人のせいにしたりなど

自分から目を背ける脆弱で愚かな生き物だ。

しかし少しでも見方を変えるだけで

それは自信に繋がるきっかけとなる。

美紅と綵は霊力を通して自分を信じる事が  
いかに大切なものであるか改めて思った。

自分を信じる事は【力】になるのだと…

## episode 06 マリスナディア（前書き）

ここから先は段々と深くシリアスになっていきます。  
好みがわかる内容になっていくので

予めご了承くださいm(\_\_\_\_\_)m

## episode 06 マリスナディア

無事霊力がコントロール出来る様になった美紅と綵。

ついこの間まではショッピングしたりカラオケに行ったりと普通に生活をしていた何処にでもいる若者2人。

神が存在しこの様な世界がまさか本当に存在するなど

針の先にも思っていないかっただろう。

しかし彼女達は、その世界の一部を見たに過ぎなかった…。

マリスナディア  
MARISNADIA

・ラピュラリス・

イメージは解放され元の闇へと戻った。

美紅や綵、ジェラスが今

何をそこに投影しているのかはお互いわからない。

ジェラスはマリスナディアに会うと言った。

しかしこの何も無い世界にいるのは彼等だけ。

一体どういう事なのだろうか。

そしてどういう人物なのであろうか…。

「もう一度言うがマリスナディアの元へ行くには  
霊力のコントロールができなければ存在できない。  
今のあんた達の霊数なら問題はないが…うま…」

「霊数ってなんなんですか？」

「……はあ」

「す、すみません!!  
気になったら聞きたくなっちゃう性格なもんで!!」

『考えるよりも聞け』

これが立花美紅の性質である。

一人で考え込むなら聞いてしまえという

美紅のやつかいな性格。

この様に例え話の途中であつても我慢できなくなり  
ついつい口のひもが緩む。

ジェラスは溜め息を吐きながら丁寧に説明を始めた。

「…霊数とは霊力の量の事だ」

「霊力の量…」

「その量が…えと、 マリスナディアさん？  
となにか関係しているんですかぁ？」

「そうだな…マリスナディアの元へゲートを繋ぐのに  
維持しなければならぬ霊数は大体で8〜9…。  
あんた達はそれを超えてるから」

「あたし達いくつなんですか？」

「イーヴァ、 あんたは…23だ。  
綵…だったな、 あんたは…20だな」

「えーなんであたし美紅より低いんですかぁー」

「仕方ない…霊力を初めて解放したんだ。  
それにイーヴァは覚醒していないとは言え  
少なからずとも基礎は出来てたからな」

「…そのイーヴァって呼ぶのやめてもらえますかー！」

「…何故だ？」

「ああーもー！！！！」

あたしの名前は立花美紅だからですー！！」

「まあまあ美紅っちい…」

「……そうか…わかった」

「それで…」

「…なんだまだあるのか…」

「その霊数つてどうやって見えるんですか？」

「…そうだないずれ身につけなければならんからな  
いいだろう。」

「……これも基本は霊力の使い方と同じだからすぐできる」

「…はい」

「じゃあ2人共向かい合って」

言われた通り向かい合ってみた。

「今までは霊力をイメージ、物質化  
そして浮遊と言う形で使ってたが  
それを浮遊、物質化、最後に  
イメージと言う形で霊力を組む。  
相手に送るイメ…」

「ほ、ほんとだあ…。」

美紅「23なんだ」

「うん…なんか数字が頭に浮かんでくるね」

「そうそれだ、あんた達あれだけやったから既にコツが入ってたのかもな」

美紅の性格と似たような部分をもつ綵。

一緒にいつも過ごして来たからかそうでないのか  
綵もまた気になると知りたくなる性格らしい。

ただ彼女の場合は好意を寄せる者にだけなのだが…。

「（ジェラスさんの霊数調べちゃえ…）」

綵はジェラスの霊数を調べはじめた。

体重計の数値が前後する様なそんな感覚が頭にフツとよぎる。  
だが暫くすると何かにぶつかった様な  
衝撃を受け綵は吹き飛んでしまった。

「いつ…たあ…い…！」

「え！？ ど、どうしたの急に…」

「あんた…俺の霊数見ただろ？」

「あはは…バレちゃいましたあゝ」

「霊数の差があまりにも激しいとそうなる。

あんた…俺が抑えてる時でよかったな…

戦闘時だったら消滅してたぞ」

「し、消滅って…」

「きき、きをつけますー!!」

「そんなに知りたいなら教えてやる。  
俺の霊数は……9万だ」

「き、9!？」

「9万…」

「もういいか？ 他に質問がないなら行くぞ。  
こんな感じでは一向に進まん…」

そう言うとジェラスは地面に霊力を放った。  
青い光が地面に溶け込んで輝き始める。  
そして暫くすると光が収まりその地面はガラスの様な  
透明な床へと姿を変えていた。

「…今から俺がやるから同じ様に霊力を使え」

「あ、はい」

ジェラスはガラスの中心まで移動すると  
両手を地面に向けて霊気を集め始めた。  
そしてジェラスを中心に霊気を少しずつ広げて行く

それが丁度透明な床と同じ辺りまで広がると霊力を放った。  
床が強く光を上げながらジェラスを包む。

「…向こうで待ってる」

「…え!？」

一言言い残したジェラスは光と共に消えたのだった。

「あ! ちょっとっ!!」

「ええ!! マジい!!」

ジェラスは2人を置いて何処かへ消えてしまった。  
果たして美紅と綵は無事にここから  
ジェラスの待つ所へと行けるのだろうか…。

「み、 美紅…やり方わかった？」

「…と、 とりあえず…やってみよっか!!」

美紅が床の中心へとやって来た。

「えと、確か…」

「こんな感じだった様な…」

すると光が床から美紅へと昇って行く。  
どうやら成功した様だ。

「や、やった…出来た…」

「馬鹿！ やったじゃないよ！！ どうやったの!?!」

「え〜っと…なんかひろげ…」

説明の途中に美紅は消え去ってしまった。

縋は美紅の名前を叫び続けるが意を決したよう  
でぐずりながらも床の中心へと向かって行くのであった。

ジェラスの元に移動できた美紅は  
すぐさま引き返そうとするが…。

「心配ない、必ずここにやって来る」

「でも綵、…わかってなかった気が…」

「感覚でわかるようになってるから。  
あんたも感じたはずだ」

「（そう言えばあの床に乗ったらなんとなく…）」

暫くすると綵も無事に到着した。

暗闇の空間からワープして来た場所は何かの建物の中だった。  
ジェラスが外に繋がる扉に手をかけゆつくりと開く。  
建物から出るとそこは庭園の様な場所だった。

ここも時の無い世界。

しかしこの様な美しい庭園をイメージ出来る程

2人は想像力豊かではない。

いや、そもそも地球には存在しない景色なので

いくら想像豊かでも決して作り出す事はできないだろう。

ここはそれほど美しかった。

「…予め言うが、ここはマリスナディアが支配する空間だから  
いくら想像しても景色は変わらんからな」

「…はい…」

「……綺麗…」

「…うん…なんか…泣けてきた…」

「うん…あたし…もお…ちょーかんどうして……る」

鳥肌が立つ程の美し過ぎる景色に涙する2人。

光はふんわり淡い色の丁度いい色合い加減。

まるで恋をしているかの様に心臓が高鳴る。

トキメキは2人に感動の涙として

彼女達の頬を伝っていき、やがて溶けていった。

「そ…れで、その…マリスナディアさんは？」

「…あそこの…神殿がそうだ」

「あ…あそこに…？」

「真っ白…だあ」

庭園を後にすると少し歩いた先に純白の建物が見えた。

その建物に近づく度に罪悪感が芽生え

感じずにはいられなくなっていく。

この様な美しい空間に自分は存在しても良いのだろうかと…。

胸が締め付けられていく思いだった。

魂をわし掴みにされている感覚。

そして神殿の前までやって来る頃には

2人共この先にいるマリスナディアを  
神という存在として頭に刷り込んだ。

10メートル程の真っ白な扉を両手でゆっくりと開くジェラス。  
この扉の巨大さにも驚いたが  
何よりもその扉を開けたジェラスに驚愕した。

「…この先だ」

神殿の中も素晴らしかった。

入ってすぐの所の中央から赤い絨毯が  
真っ直ぐに先が見えなくなるまで延びていた。

天井は果てしなく高い。

マリスナディアとは巨人なのだろうか…。

それに塵や埃が一切見られなかった。

芸術の二文字では例え切れない程の建物である。

「この先に…マリスナディアがいる」

巨大な扉の前で足を止めたジェラス。

この先にマリスナディアがいる…。

ジェラスは美紅達に振り返る事はなく  
白い扉を眺めながら話し始めた。

「一つだけ言っておきたい事がある…」

「はい…」

「言っておきたい事？」

「これは大切な事だから真剣に聞いて欲しい…」

「…わかりました」

「マリスナディアは創造神デウスと対になる存在なんだ」

「…じゃあやっぱり神様だったんだ…」

「だよね…」

あたしもさつきからそうじゃないのかなあって…」

「破壊神と呼ばれている」

「は、はかい…しん」

「どんな神かは言わなくてもわかるだろう…」

「じゃあ…悪い神様なんだあ…」

「…何故だ？」

「あーまたはじまつた」

「……………神に善悪も何もない。  
破壊が何故悪なんだ？」

何故悪とそう決めつけられる…？」

「そ、それ…は…」

「真に、この宇宙に善や悪と言う秩序はないそれは人間が勝手に作り上げた幻想だ」

「ジェラスさん、それなら正義って何？  
つてなっちゃんじゃないですか…」

「俺は正義の為に戦っているのではない。  
そもそも正義なども存在しない…」

「じゃ、じゃあジェラスさんは…  
一体何の為に…？」

「…そう言う役割で生まれてきたから」

「役…割…？」

「話がそれたが…」。

とにかく破壊神マリスナディアは創造神デウスと対を成し  
デウスはマリスナディアを滅ぼそうとしている」

「神様もケンカ……するんだねえ…」

「マリスナディアは……今……」

存在が…消えかかっている…」

episode 07 大いなる存在（前書き）

調子がいいので暫くはgenusをUPしていきます。

ETERNAL SAGAはもう少しお待ち下さい。

m  
———  
m

## episode 07 大いなる存在

人は一体何の為に生きているのか…。

答えはいたってシンプルなのかもしれない。

短い人生の中で人は幸せに向かって生きているのだ。

では幸せとは？と聞かれた時、恐らくすぐに

答えられる人はそう多くはないだろう。

何故なら人間とは決して満足を得られない生き物であるからだ…。

　　大いなる存在　　  
G r e a t e x i s t e n c e

・ラピュラリス・

「存在が…って…。

死んじゃうって事なんですか!？」

「死ぬ…とは少し違う。

あなたの言う【死】とは…

肉体の消滅の事だろ？」

「あ、はい…たぶん…」

「そうではない。

肉体の死はいずれ再生される…。

マリスナディアは魂そのものが消えかかっているんだ。  
存在そのものが無くなる」

「……そうなん…ですか…」

「神様…なのにい？」

「……何か勘違いしていないか…？  
神を何だと思っている？」

「え、神様って言えばあ…。  
全知全能ってよく聞きますけどー」

「人間を創ったとか」

「…人間を創造した事は確かだが全知全能ではない。  
何故なら神もまた…創られた存在だからだ」

「神様も！？」

「…マリスナディアの存在が消えてしまうと  
俺やあんた達人間にも影響が出る」

「…どうなるんですか」

「もう既にその予兆が始まっている。  
あんた達地球で見ただろ…」

美紅はすぐに理解できた。

そう…

人間が醜い化け物と変形していた様を  
ジェラスは言っていたのだ。

頭に沸き上がってくる数々の異形の者。  
足や顔が膨れ上がった時に見た綵の姿。  
マリスナディアという存在が消えると  
人間はどうなってしまうのだろうか…。

「灰の影響かと思ってました…」

「あの灰は…マリスナディアの魂紛だ…」

「こん…ぶん？」

「…地球の言葉でわかりやすく言えば、  
治療不可能なウィルスの様なものだ」

「あのうジェラスさん…」。

美紅はなんで平気なんですか？  
あたしは変わっちゃったのに…」

「それ…あたしも知りたい…」

「それは…イーヴァが転生し、  
あんたの魂に宿っているからだ」

「その…イーヴァって誰なんですか？」

「前にも言っただが…誰かではない」

「じゃあ…イーヴァってなんですか？」

「……無理だ」

「え？」

「霊力の事も理解できなかったあんたに  
理解できるはずがない…」

「……………」

ジェラスの言葉を最後に黙り込んでしまう美紅そして緑。

『イーヴァは誰かではない』

ジェラスはそう言った。

ではイーヴァとは人間ではないという事なのだろうか…。

彼の言った通り今の美紅には

推測や憶測ですらまともに立てられないでいた。

「とりあえずそんなところだ…」。

【時の縛り】が無いこの地にまで影響が出てくるかもしれん…

そうなるマリスナディアの消滅は免れない

アーダを見つけ出して、 あんたが早く覚醒してくれる事を願う」

「は、 はあ…」

そして、 扉は開かれた。

中に入るとそこはさっきまでいた神殿とは

明らかに違っていた。

この空間の周りはまるで宇宙を見ている様だった。

床の材質は確かにさっきまでいた神殿の材質。

しかし段々と闇に溶け途中から見えなくなっている。

壁は無く、 幾千の太陽と星が散らばっており

その点が幾つも重なって薄い霧を作り上げている。

神はここから宇宙や我々人間を見ているのか。

そう思わざるを得ない程、 壮大で神秘的な部屋だった。

ジェラスはある所で足を止めると床から1m程の

細長い金属的な何かに手をかざした。

上昇しているのか下降しているのかはわからないが  
周りの宇宙から遠ざかって行く。

そして…止まった…。

「マリスナディア、連れて来た…」

「は、はじめ」

「あ、あ…あ、ああ…」

美紅と綵は言葉が出なかった。  
彼女達の瞳の奥に映し出されたもの…それは

人間が絶対に想像できない姿をしていた存在だった。

目で見る…という概念ではない。

心で、魂で感じる感覚だった。

宇宙の様に神秘的でありまた恐怖心もあったが

何よりも涙が止まらない。

悲しみや喜び、いろんな感情が一気に

体全体で感じる。

これが【幸せ】というもののなのか…。

2人はいつの間にかその場でひざまづいていた。

そうまるで、全てを悟ったかの様に…。

「…地球では立花美紅と呼ばれている。

彼女がどうやらイーヴァのエテリアを宿した様だ」

ジェラスは会話を始めるが美紅達には

独り言を話しているかの様に映る。

美紅も綵も金縛りにあったかの様に

ひざまづいたまま動けないでいた。

何故か頭を上げる事もできない。

「……ああ。覚醒もしていない。

霊数も微量だ。…ああ、そうだ」

ジェラスの会話の内容しか聞きとれないが

どうやら自分の事を話しているのかと理解する。

「ああ彼女も…昇化させた。

……心配ない、霊力は安定している。

………わかった、本当にそれでいいんだな？」

気がつくくと神殿の外にいた。

そう、美紅と綵は余りにも大きな存在を前にした為に途中で気を失っていたのだ。

ぼんやりと記憶の波に逆らうが何も思い出せない。

現実か夢なのかも区別がつかない。

そんな状態の美紅と綵にジェラスが声をかける。

「気がついたか…」

「…あ…ここ…は…」

「…神殿の前だ。そのまま聞いてくれ…。

…マリスナディアはあんた達に浄化を頼みたいのだそうだ」

「じょう…」

「…よう…か…」

「はあ…。いいかよく聞け。

あんた達の地球は今マリスナディアの影響が強く出始めてきているんだ。

このままだと人間の存在そのものが危うくなる…。

だがデウスはまだ【器】を手に入れていないから  
とりあえずは安心していい…」

「……………」

「……………」

「…今からゲートを使って【ニヴルヘイム】へと向かう。  
わかったか？」

「……………はい……………」

「…おいしつかりしてくれ。  
はあ…。…じゃあ……………ついて来い……………」

神殿を離れ庭園へと戻った3人はゲートを使って  
再び最初の空間へと戻って来た。  
マリスナディアの空間から解放されると  
少しずつ正気を取り戻す美紅と綵。

「あの…ジェラスさん……………」

「……………何だ……………」

「…浄化って…何するんですか？」

「…それは実際にニヴルヘイムへ行くとわかるから……………」

「…あたし…も？」

「…そうだ。これはあんた達2人にしかできん」

話しながらもジェラスはニヴル Heim へと繋ぐゲートの準備を進める。

「【時の縛り】がある世界のアンタ達だからできる事なんだ。俺は一緒には行ってやる事はできんが…」

「じ、ジェラスさん一緒に行かないんですか!？」

「【行け】ないんだ」

「どど…どうしよ美紅」

「心配しなくていい…」

「【ハート】という者が引き継ぐ事になってるから」

そして再びあの床を形成したジェラス。

美紅と綵と一緒にワープできる様に2つ作っていた。

「行き先は既にニヴル Heim へと合わせてある…やり方は同じだから」

「……わかりました」

「向こうに着いたら泉に向かえ。」

巨大な大木のそばにあるからそこを目印にして行くんだ」

「はい…」

2人は透明な床に乗り霊力を手に集中させる。

「ジェラスさん…その…。」

いろいろとありがとうございました」

「ああ。じゃあな」

「あ、あ、ああの…」

「……なんだ」

「え、ええ、えとお…。」

ま、ままたあ…会えますよねえ？」

「…何故だ？」

「え、い、いやあ…そ、そその…」

「はあ…ジェラスさん、それ口癖なんですわね……」

「あ、や、ややっぱり、なんなんでもない…ですう。  
あ、あははははは…」

「  
…？」

2人は靈力を放ち、  
光と共に消えた…。

## episode 08 ニヴルヘイム

地面という地面、 全てが氷で出来ていた。  
しかし不思議と寒さを感じない。

触ってみるとそれでも冷たい氷…。

そんな矛盾で出来た世界にやって来た美紅と綵。

彼女達は今、 ニヴルヘイムにいる…。

ニヴルヘイム  
N i f l h e i m r

- ラピュラリス -

氷界ニヴルヘイム

2人は辿り着くとすぐに見つけた。

【巨大な大木】とジェラスから聞いていたが  
どうしたら木がこれほど成長するのかと思うぐらいの

巨大さだった…。

大木の幹はまだ先にあるにも関わらず

葉は2人の頭上を覆っている。

葉の隙間から空が見えるがまるで網だ。

それに氷で透けているので地面の中が覗けるのだが

凄まじいまでの巨大な根っこが

この世界全てに張り巡らされている。

「今……思えばさあ美紅」

「ん〜？」

そんな地面を眺めながら大木の幹を目指す2人  
会話は移動しながら続く。

「あたし達地球で唯一生き残った…人間なんだよね…？」

「……そっか。みんな変わっちゃったからね……」

「な、なんかさあ、あたし達って  
運がいいのか悪いのか…わかんないよね」

「…だね」

「そりゃね…助かって変な化け物にならなくてすんだけどさ  
この状況も素直によかったって思えないじゃん？」

「まあ……ね」

「…地球に帰りたいな」

「…でも、 化け物いるんだよ？」

「そうだけど……このニブ？ なんだっけ？」

「ニヴルヘイムー」

「あ、 それぞれ。 とかさ、 さっきの神様のところか  
ちよー綺麗だけど…なんかさ…」

「うん…… 綵っちの言いたい事わかるよ」

「はあゝあ… マック行きたい」

「あ、 あんたね…」

ダイエツト中だからって

この前誘った時断ったじゃあん！！」

「こんな事になるんだったら行けばよかったよお…」

地球からやって来てどれくらい経ったのだろうか…。

一日、 一週間…それはわからない。

【時】が存在しないので感覚でしか掴めないが  
綵は既に限界がきている様だ。

地球そのものにホームシックを抱く

その気持ちは彼女達2人にしかわからないだろう。

「…綵っち頑張る

あたし達超能力使えるようになったじゃん！」

「それっていい事？」

「い、いい事かはわかんないけど…  
絶対経験できない事できたでしょ？」

「あ、あんたいつからそんなポジティブ人間になったのよ」

「まあだからさ！ 頑張っていこうよ！

それに2人いれば寂しくないじゃん！

最強コンビだよ」

「そか…、そっだよねえ！！  
な〜にブルー入ってんだろーね

あはははは！！！！！！！！！！」

「（ふう… やつと立ち直ったか…。

綵っち… 人が落ち込んでる時は気にしないのに  
自分ん時だけ深刻になるんだからあ… もう）」

元氣を取り戻したところで大木へと向かう。

あれだけ悩んでいた綵の立ち直りは早かった。

「てか… ちょーでかくない？」

「でかいでかい…。見た事ないもん…」

「あ…泉が見えてきたあ。あそこだよね？」

「そ！走る？」

すると驚きながら急に立ち止まった綵。

「…美紅っち、それ意味わかって言ってる？」

高校ん時にクラストップの実力を持った  
つきしまあやな  
月島綵菜に挑むって事だよ？」

「高校の時でしょ？何年も前じゃん！  
それになんか調子いいんだー」

そっついながら両足を軽くついて跳ねると  
それを見た綵の闘争本能に火がついた。  
軽くムツとしながら走る準備を整える。

「言つとくけどあたし、マジでやるから！」

「いいよ！！あたしもマジだから！！」

氷の世界ニヴルヘイム。

こんな地で徒競走が行われようとしていた。

異世界での徒競走…間違いなく人類史上初となる。

「いい？」

「いいよ」

「ようい……………」。

「どおくん!!」

スタートと共に一気に差を広げる綵。

大木まではおよそ200mといったところ。

美紅が段々と綵から離れて行く。

「はあはあはあ…ほ…ほら…はあはあ…  
だか…ら…………はあはあ…言ったん…だよ…」

「はあはあはあ…（は、はや〜!!）」

綵は残り100mを切った。

美紅はまだ追いつけない。

「はあはあ…（ん？ …待てよ……）」

「み…みくー！！ はあはあはあ…  
そ…んなんじゃ勝てないよ」

綵が振り返りながら走っている時だった。  
いきなり美紅のスピードが増し、 追いついて来たのだった。

「う、 うそお…！？  
はあはあはあはあはあ…」

綵もスピードを上げるが比ではない。  
すぐに美紅に抜かれてしまった。

「げっ！！ あ、 あんた…はあはあ…  
な…なん…はやすぎー！！！！」

綵があと残り20mという時  
美紅は既に着いて待っていた。  
そして遅れて着くと氷の地面だというのに  
そこへ倒れ込んだ綵。  
酸欠状態で倒れた体勢のまま言葉を零す。

「はあはあ…んた…なんでそんな…  
は、はいの…はあはあ」

美紅にはまだ余裕があるのか中腰で言葉を返す。

「綵っち！　なんであたし急に速くなったかわかるー？」

「わかるわけない…じゃん…はあはあ…しぬう…」

「んーっ！！」

ほらー！　これだよ！！　綵っち」

美紅の全身が靈気で包まれている。

靈力を使った事はそれで理解できたが

どうやったのかが知りたい綵。

スタミナが回復して起き上がると

自分も試してみたいのか美紅を問い詰め出した。

「だから…全体に届く…あ！　出来たそれぞれ」

「マジだ…ちょーみなぎるー！

てかあ…美紅っち反則じゃあーん！！！」

「えゝ反則って靈力なしって言わなかったじゃん！！」

「霊力なしなんて考えつかないって普通!!」

「ま、まあ……。」

あ、誰か来る……」

「誰……?」

泉からこちらへ向かって来たのは  
赤い髪の男だった。

たるんだ腹を揺らし走りながら声をかけた。

「よく来たねー!! 美紅ちゃんってのはどっち?」

「は、はい。あたしです……」

「じゃあ君がイーヴァのエテリアを宿した女の子で……」

「あ、ああ緑菜です……」

「緑菜ちゃんね! 2人共よろしく

あ! あいつ僕の名前言った?」

「……ハート……さん?」

「え? こ、この人があ!?」

「そう よろしくねえ緑菜ちゃん!」

「な、なん…か…ジェラスさんと全然…  
か、感じ違います…よねえ…」

「あんな暗い奴と一緒にしないでよー。」

「これからは俺が君達にいろいろ教えるから！」

「あゝあ…ジェラスさあゝん…会いたいよあゝ」

ハートの案内で泉の前へつやって来た2人。

周りは氷だらけだと言うのにこの泉だけは  
凍ってはいなかった。

泉のすぐそばには小さな洞窟の様な

空洞があり地下へと続いていた。

その中に入って地下へと降りて行くハートと美紅達。

「ハートさあゝん」

「なにー？ どしたー？」

「ハートさんはジェラスさんとどういう関係なんですかあー？」

「ん？ どういう関係？」

「え、 えつとー、 お友達かなあ…って！！」

「んゝ簡単に言つとそうだねー」

「あのう…浄化ってなんなんですか？」

「え！？ まさかあいつそんな事も教えないでよこしたのー！？」

「こっち来ればわかるって言っていましたけど…」

「あ…あいつ…！」

「そっかー。じゃあ、教えてあげないとね」

「は、はい…」

「（だ、だめだあ…全然やるきでない…）」

「今から君達は地球に帰ってもらっただけどー」

すると緑はさっきまでとは態度が

ガラリと変わりハートの話を熱心に聞き出した。

「え！？ 地球にー！？」

「マジですかあ？？ いつですかそれいつ帰れるんですか…！」

「ま、待つて…順番に説明するから」

軽く咳ばらいを済ませると2人に説明を始めた。

「まず、浄化について言うね！

浄化って言うのはマリスナディアの魂紛で変わった人間…

僕達は【ダスト】って呼んでるんだけど

ダスト達をある武器を使ってやっつけて欲しいんだよねー」

「…どんな武器なんですか？」

「それはねー、あ、着いたからとりあえず入って！」

地下の一番奥には部屋がありその中に入ると  
部屋の真ん中に宙に浮いている握り拳ほどの  
玉があるが、それだけで他は何もなかった。

「まずは、君達に武器を作ってもらわないとダメなんだ。  
浄化の話は後でいい…？」

「は、はい全然…」

「武器を作るってどうするんですかあ？」

「はいこれ！」

それに霊力を送って作ってもらっただけどー」

するとハートは銀色の腕輪を2人に手渡した。

「え、普通にこれ…腕に付けるんですか？」

美紅が腕にはめると腕輪が丁度いい辺りまで縮小した。

線にも同じ現象が起こっている。

「縮んだあ……」

「うん、もう取れないからね」

「え？」

「じゃあ作り方言うねー！！」

君達はもうジェラスに霊力教わったみたいだから  
すぐわかると思うんだけどゆっくり説明するからね！  
まずイメージでどんな武器にするか想像してみて！」

「イメージで……」

「へへ、あたしはもう決まったあゝ」

「はやっ………うゝん、  
これしか思い浮かばない」

「イメージ出来た？」

「じゃあ腕輪に霊力送ってみて！！」

2人は霊力を腕に集中させた。

青白い霊気が段々と腕に集まると腕輪に変化が起きた。

「腕輪があ……」

「光…った」

「そうそう！！ やっぱコツ掴んでるから早いねえ

じゃ次、 イメージした武器の名前を決めて呼ぶんだ！

あ、 物質化も一緒にね！！」

「名前…ですか？」

「えーなんにしょー」

2人は考え込んでしまった。

「それがイメージした武器を認識する為のものになるから  
決めたらもう変えられないから注意してね！！」

「うーん…ますます考えちゃうなあ…」

「決まらないなら僕が決めてあげるよ？  
どうしよっか？」

「あたしい、 じゃあお願いしよっかなあ」

「ほんとー！？

じゃあちよつとイメージ見るねー」

そつ言つと綵の腕輪に手をかざした。

「…なるほど。カッコイイ武器だねえ  
ん、じゃこれで……」

「な、なんなんですかその…ゲツ」

「待って待って!! 呼び出す時に言わないとさー!!…!!」

「は、はあ……」

「…じゃ綵菜ちゃんやってみて!!」

「(…名前を言いながら霊力だね…名前を言いながら…)」

げ…、

月影刃!!…!!」

すると綵の腕輪が強い光を放ち光から刀が現れた。  
いつの間にか手に握っていた。

「ああ！！ 出て来たあー」

「刀だー」

「カッコイイよね〜  
美紅ちゃんは？」

「てかちょーかるいんだけどー！！」

綵は少し素振りをしてみた。  
その素振りなのだが、かなりしっかりと  
力強く振り下ろしている。

「そか、 綵ずっと剣道やってたもんね」

「よっ！ ほっ！ そっ  
だから刀〜」

「ほら！ 美紅ちゃんも決めないと〜」

「じゃあ、 あたしも決めて下さい」

「お〜 じゃあ腕かして…。  
う〜ん ナイスナイス〜カッコイイじゃないの〜  
しかも2つ？ 大丈夫？ 霊力いるよ？」

ハートはそう言いながら霊数を調べ始めた。  
美紅の霊数は23。

この数字が果たして吉と出るのか…。

「うーん…ギリギリだねほんと…。  
多分その武器は21ぐらいになるから  
武器出すとかなり辛くなるよ?」

「そうなんですか…」

「あ!…! じゃあ提案なんだけど  
威力ちよつと落としてみよっか」

「……こんな感じですか?」

イメージを変えてみる美紅。

「15ならいけるいける  
じゃ、こんなので…」

「……え、な、なんですかそれ…」

「いいからいいから!!  
さ、美紅ちゃん」

「は…はい」

果たして美紅がイメージする武器とは  
一体どんな武器なのだろうか…。

episode 08 ニザルヘイム（後書き）

感想待ってます

episode 09 浄化

「セレストレイア!!!」

美紅の腕輪が強く輝き出した。  
腕輪から手に光が移り、その光は少しずつ  
形となっていた。

「…あ、あんた、それ、…武器？」

「え？ う、うん…」

p u r i f i c a t i o n  
浄化

・ラピュラリス・

氷界ニヴルヘイム

美紅の手に持っていた武器：それは  
傘の様なものだった。

「傘っぱいんだけど？」

「えー傘じゃないよー！！」

「武器でイメージって言ってるのに  
なんでそんなのが出てくるのよー」

「だって考えたら頭にこんなのが浮かんだんだもん」

「美紅ちゃん、

ちよつとそれに霊力込めてみてくれるかな…」

「え、 はい…」

傘の様なものに霊力を込めた。  
すると瞬時に形態が変わった。

「！？ びびっくりしたー！！」

「すごーい！ 変形したあー」

傘は鋭い剣に変わっていた。  
さつきまでの面影が一切見られない変わり様。  
しかし美紅の武器にはさらにまだ続きがあったのだ。

「あんたでも2つあったんじゃないの？」

「え？ うゝん…そのはずだったんだけど…」

「なに言ってるんだよ綵菜ちゃん  
ちゃんと2つあるじゃん」

「え？ どれですかあ？」

「美紅ちゃん、もっかい靈力込めてみて」

「あ、はい…。んゝ！！」

するとまた瞬時に変形した。

「あ、戻った…」

「それ広げてみてくれるかなー」

「はい…………あ、あれ？ 開かない…」

「違う違うー、 霊力使って」

霊力を込めてみると傘は開いた。

「それがもう1つの武器だよ」

「え？ な、 なんですか？」

「何言ってるの、 盾だよたーて！」

「ああ」

そう言いながら傘を回しながら自分の作った武器を眺めた。

「実を言つとね美紅ちゃん」

「はい？」

「その武器、 6 変形するよ」

「え？」

「ろ、 6！？」

「でもあたしそんなイメージしてませんけど？」

「イーヴアの影響でそうなっちゃったんだろっねー」

「イーヴア…」

「まあ今の美紅ちゃんの霊数では全部扱うのは無理だけどね」

「美紅」

あんたでもすごい武器作ったじゃん！！

ただの傘じゃなかったんだね」

「えへへ！ まあねー」

「さ、じゃあ今度は武器の戻し方教えるね！

絶対覚えておいてほしいんだけど

戻す時は腕輪をはめてる手に持ってたね、

あとは霊力を込めるだけで…」

すると美紅と綵の武器が光になり腕輪へと流れていく。

光は腕輪に吸い込まれる様に消えた。

その腕輪を見ながら綵はある事に気づいたのだった。

「あれ？ これ…」

「ん？ なに、腕輪がどうしたの？」

そう言いながら美紅も自分の腕輪に目を向ける。  
すると腕輪に模様が浮かんでいた。

「さっきまでなかったのに」

「それは君達の霊力がインプットされて腕輪の力が解放されたからなんだ」

「腕輪の力ですか…」

「うん…あ！ 例えば！  
敵と戦って武器を奪われました」

「はい…」

「でも敵は君達の武器を触れないの  
何故ならその腕輪の力で護られてるから」

「へえー、 じゃあーあたしだけにしか使えないんだあ」

「例えば…」

「え！？ まだあるんですか？？」

「ふふ、 そうなんだよ

例えば敵と戦ってて、 武器が落ちちゃいました。  
でも霊力をちょこつと込めるだけで  
自分の手に返ってくるんだ  
どう？ 凄いよねー！！」

「便利な腕輪ですね」

「戻し方はもうわかったよね？  
じゃあいよいよ次は浄化についてだね！！」

するとハートは部屋の真ん中にある玉に手をかざした。  
玉の丁度上に画面の様なものが現れ、  
慣れた手つきでそれを見ながら手を動かしている。

「いきなりだとほら、 2人ともまだ霊数少ない訳だし…。  
ダスト1体だけちょっと浄化してみよっか」

「えゝ！！？」

「も、もしかして戦うんですかぁー！？」

「ちょっと待ってね…あ、 いたいたこいつ霊数11だ。  
大丈夫 11だから余裕だつて」

「み、 みみみくゝ！！ あの化け物だよね！？」

「う、 うん…」

「準備いい？」

「え、 え、 あ、 じゃあちよつとま」

「行つてらっしゃい」

強い光が地面から現れて美紅と綵は  
吸い取られる様に光と消えてしまった。

「まって…あ、あれ？」

「な、なに？ ど、どこ？」

ま、真っ白なんだけど…」

すると2人の背後にペチャペチャとまるで  
水を含んだ雑巾の様な音が聞こえてきた。  
喉元が締まった声が徐々に近づいて来る。  
恐怖の余り後ろを振り向けない2人。

「みみみみくみくー！！」

どどどするのー！！」

「あ、あ、あや、う、うづこけないよおー！！」

「…ア…ぎあ…グ…ウ…ガ…」

「みみみみくうー！！！！！！！！」

それを画面から見ていたハートは美紅達に声をかける。

早く武器出してー！！

ちゃんと名前言わないとダメだよー！！

「あ、あ、あやあ、や、やるしかない…みみたいだね…だね」

ゆっくりと振り返る美紅。

真っ白の何もない空間、彼女の瞳に映っていたもの…

異形の者は…。

すぐ目の前で今にも裂けそうな口をめいいつぱい広げていた。

「いやあああああつ！！！！！！！！！！」

美紅はとっさに靈力を異形のよだれがかった口に放った。

「ギョアッ！ ……ベ…ヤエ…グ…エ…」

異形の者の口はバラバラに吹き飛んでいた。  
ピクピクとけいれんを繰り返しながら少しずつ  
動きが止まっていった。

「はあ…はあ…はあ」

「みみみく、 だだだいじょうぶ！？」

「はあ…はあ…あ、 あれ…？ 変だな…」

「ど、 どどしたの！？ な、 なにがへ、 へへん？」

あれほど恐怖に感じていた異形の姿をしたダスト。  
しかし一戦して美紅の恐怖心は無くなっていた。

「あれ？ なんか…大丈夫みたい…」

「う、 うううそー！？」

2人共、 武器でやつつけないと意味ないよー。  
そっちにまた送るからちゃんと武器使っただよ？

わかった？？

「は、はいー！！」

暫くするとダストが光と共に現れた。

綵はまだ恐怖心と戦っている。

しかし美紅は少し違っていたのだった。

「え、 ええつと…名前と霊力…。

せ、 セレストレイア！！」

すると美紅の手には先程の武器が握られていた。

「グ…イ…あ…げ…ガ…ぐ…」

「うわあっ！！ ち、 ちか、 ちかいつて！！

え、 えと〜！ えとけ、 けんけん剣んー！！！！」

セレストレイアは美紅が思うままに瞬時に変形する。

「イ…グ……………がああああ！！！！！！」

と、 いきなりダストはスピードを上げながら

美紅へと襲いかかって来た。

「みみみくー！！！！！！！！！！」

も、もおおー！！！！！！！！！！」

美紅の身に危険を感じた綵は無意識の内に  
霊力を全身に解放した。

画面を通して見ていたハートの目が鋭くなる。

「（霊数が28まで上がった…）」

「美紅！ 待ってて今行くから！！」

月影刃っ！！」

走りながら武器を呼び出すとダスト目掛けて斬りつけた。

「ギヤアアアアアア」

肩から斜めに斬りつけると

その瞬間に焼けた様な音と煙りが上がる。

そして…肩からゆっくりと切断されていく。

そのまま倒れたダストは光の玉となっていたのだ。

光は何故か綵の月影刃に吸い込まれて行った。

「あ、 あら？ あたしの武器に入っちゃった…」

それが浄化だよ

おめでとく よく頑張ったね！！

「あ、 でもあたしの時はなかったんですけど…？」

だって美紅ちゃんはそのセレストレイアを  
使ってやつつけなかったでしょ？

「あ、 なるほど、 そういうことなんですね」

「美紅、 あたしもなんか大丈夫なっ たみたい…」

「よかったじゃーん！！」

馴れてきたみたいだね

あ、 さっきダストを浄化して  
魂を吸い取ったでしょ？ 綵菜ちゃん

「あ、 はい吸い取ったみたいですー」

それは元々マリスナディアの魂紛だから  
霊力を増大させる事が出来るよー！！

「あのく、 意味わかんないんですけどー」

つ、 つまりダストをいっぱい浄化すれば

それだけ霊数も上がって強くなるってわけ

「え！？　そうなんですかあ」

じゃ、次いくよ

今度はまとめて10体  
それ

「じ、　じ、　10ー！？」

「い、　いくらなんでもむむりむりむり！」

そう言いながらも2人は着々と浄化を果たす。

そして、　何回も何回も戦いを繰り返し続けた美紅と綵は  
こんなになるまでに成長しているのだった。

「美紅　また勝負！！　いい？」

「へへ、　負けないよー！！」

「グウヤエー」

「あ…あ…グ…エ」

美紅ちゃん、　綵菜ちゃん…

もうそろそろいんじゃないかなー。

もう409521体目だよー？

じゅーぶんだってもー！！

「じゃあこれ最後にしますー」

「綵、 あたし達そんなに浄化してたのー？」

「数えてなかったから…ほらやるよ」

美紅と綵の周りには数百体のダストがいた。

「綵、 いい？」

「うん！」

「よし…突撃だ…あ…!!」

美紅は無数のダストに向かって走り出した。  
セレストレイアを剣に変えてダストの1体に  
斬りかかる。

「やあ！ やあ！ たあー!!」

ダストは一撃で浄化され次々と他のダストへと  
ターゲットを変えていく。

「ギョア!!」

「あ…ぐあ…あああああ!!!!」

後ろから美紅に襲い掛かるダストだが…。

「グア!? ギシュ…」

「ガバ…ギ」

傘に姿を変形させて肩にかけた美紅。

傘は盾になって後ろのダストの攻撃を防いだ。

「ざ…んねん!! はあ!!」

再び変形し剣に変わると横一閃に薙ぎ払った。  
ダストは耐え切れず消滅する。

「イギヤアア!!!!」

今度は美紅の頭上から3体のダストが飛びかかってきた。  
すると剣はなんと2つに分かれ拳銃となった。

「それー!!!!!!」

美紅は2丁の拳銃を乱発し素早くダストに命中させると  
また剣へ変形させ次のターゲットに走って行った。

「…うざあ…」

そして綵はというと…。

「うざすぎ…!!」

そればっかじゃん！ 少しは学習しなよ…」

ダストに囲まれてしまっていた。

「ぶぎゅるああああ!!!!」

「ギギヤア!!!!」

「あんた達単純すぎー!!」

綵の両サイドから飛び掛かってきた。

霊弾を1体に放つと素早くもう1体の首を斬り落とした。

綵が着地するとタイミングよく魂となって浄化された。

「グビヤア!!」

「ギガガガグゴ… あ… ああああ!!」

「そんなだったらまた、あれやっちゃうよ?」

そう言いながら綵は月影刃に靈力を送った。  
靈気を帯びた月影刃は青く鈍く輝く。

「いっつつけえええ!!!!!!」

綵は月影刃をダストの群れに投げ飛ばした。  
月影刃は回転しながらダストを斬り刻んで行き  
片っ端から浄化されていく。  
そしてまた綵の手に返る。

刀を持つと月影刃は光となり腕輪へと戻った。

「楽勝」

「

まだ戦闘中の美紅は残りあと5体だった。

「あ、綵っち終わってる…」

あゝあ…負けちゃったな…」

肩を落とす美紅に5体一気に襲い掛かってくる。

「はあ…またそれか…」

「ゲゲエゲゲアア！！！！」

溜め息を零しながらセレストレイアを変形させる。  
形態は黒い物体だった。

「（あ、また新しい形態だ…。

あれで美紅4つ目じゃない？

何、あのでかいの…）」

「消えちゃえー！！」

霊力を込めると黒い物体は筒状に変形し  
筒の中に蓄積されていく。

そして彼女と同じぐらいの大きな黒筒を  
肩に乗せると信じられない巨大な霊力を放った。  
まるで霊気で出来たレーザー。

5体まるごと飲み込むと全て消滅し浄化された。  
放ち終わるとまた傘形態に瞬時に変形する。

そして魂が美紅のセレストレイアに吸い込まれるのを  
確認すると光となって腕輪へと戻した。

「あ、あんた…随分感じ変わったよね…」

**e p i s o d e   1 0   帰還   (前書き)**

長いこと放置してたのでUPします。

episode 10 帰還

『慣れ』

これは良い意味でも悪い意味でも人間の特徴の1つである。  
どれだけ高価なダイヤモンドであつても

どれだけ容姿端麗であつても

最新技術が次々開発されて暮らしが豊かになつても

常にその眩しい光を見ていると慣れてしまい

眩しさを感じなくなる。

これは何故なのだろうか…。

人間は常に満たされない『欲』でできた生物。

今よりも明日、明日よりも明後日という感じに

『完全』なるものを目指し、向かっている。

だが離れてしまえば近づけなくなり、

近づくともた離したくなる。

そうやって人間はまた同じ所へ返ってくる。

流行のファッションが良い例えだ。

人間は『完全』なるものを知らない…。

故に人間は完全になる事ができない。

『慣れ』

という不安定要素がある限りこの無限地獄は続くのだ…。

・ラピュラリス・  
氷界ニヴルヘイム

いよいよ地球へ帰る事になった。

時が流れていないというのに

果てしなく時が流れた感じがしてならない美紅と綵。

【時】が存在しない世界…それは、

時計の無い部屋の様なもの…なのかもしれない。

「さあそれじゃあいよいよ地球に行くんだけど」

「美紅…やったねー」

「うん　綵」

「まだまだ説明しなくちゃいけない事が

いっぱいあるけど君達を地球に送ってから

一つずつ教えるから

じゃあ準備はいい？」

「はい！」　「はあいつ！」

「頑張つてねー！！」

美紅と綵は光に包まれフツと消えた。

次に2人が目にしたのは紛れもなく地球だった。  
辺りはまだ真夜中、 風で木が揺れる音が  
聞こえる程静まり返っている。

見渡すとブランコや滑り台などがあり  
どうやら小さな公園の中にいるようだ。  
しかしここが何処なのか…。

要約地球へと帰れた2人だがお互い首を傾げる。

） 帰 還 ）

T h e r e t u r n

「綵…ここどこ？」

「どこだろ…」

とりあえず公園を出て周りを歩いてみる事にした。  
コンクリートの道路に電柱に電話ボックス  
そしてしばらく行くと大きな道路が見える。  
久しぶりに見る景色にはしゃぐ綵。

しかし美紅は不思議に確かめる様に辺りを見る。

「綵…、なんかおかしくない？」

「おかしいってなにが？」

「だって建物が一つも壊れてないんだよ？  
あんな大っきな地震があつたのに」

「あ！　そういえばそうだ…なんで？」

「わかんない…。  
わかんないけどなんか変…だよな？  
ダストもないし…」

「てかさあ、　　ここどこお！？」

目的もなくただ歩く2人。

歩道橋を見つけ上から周囲を確認する。

「なんかさ、　　夜なのに暑くない？」

「暑い暑い…てか夏？　　って感じじゃない？」

と2人が会話しているといきなり体が  
一瞬ブルッと振動した。

思わずびっくりして声を上げる美紅。

それを見て綵が尋ねると綵にも同じ現象が起きた。

「……………なに今の……………ひゃっ！？  
なによこれえゝ！！！」

「あ、あやも感じるゝ！？」

「！？　　いやあ！！　　まただゝ」

理解不能な出来事に恐怖の余り2人が抱き合った  
その時だった。

お互いそれぞれ相手の腰を触ってみた。

「ねえ…まさか振動の正体って…」

綵が美紅のポケットに手を入れると…

「なんだあ携帯じゃああん」

振動の正体はなんと携帯だったのだ。

こんなものに怯えていたのかと愚痴る綵。  
しかし2人の携帯はまだ振動している。

見てみると着信中と出ていた。

どちらにかかってきているのも番号通知無し。  
出るか出ないか迷った2人はお互いの顔を見ながら  
恐る恐る電話のボタンを押した。

「……もしもし」「…もしもし」

あっ！！ やつと繋がったあ！！

んもう早く出てよね〜！！  
無事に着いたかなー？

「ハートさんっ！？」「ハートさあんっ！？」

2人は目を丸くしながら声を揃えた。  
どちらも電話のスピーカーからハートの声が

聞こえている。

「これ、 どうなってるんですか!？」

これからはこうやって連絡するから  
で、 さっそくだけでも…

「ごめんなさいいゝ!!!!!!」

いきなり耳の鼓膜が破れるくらいの大声で謝る  
ハートの声に同じタイミングで電話を離れた。  
耳がキーンと鳴る。

2人はまた同じタイミングで反対の耳に変える。

あのね、 時間を操作するのって初めてでさ…  
ちよつと失敗しちゃったの…

「失敗? え、 どういう事ですか?」

2012年に送るつもりがね…そのう…  
2010年…つまり2年前に送っちゃったの

「ええ!？」

でも心配しなくていいから

今わかったんだけどそこにダストの反応があるの  
ついでに浄化してきてくれるかなあ？

「ダストが？ …何もいませんけど？」

近くにいてるって意味じゃなくて  
その時代にいてるって事。

ここからじゃ場所は特定出来ないから  
君達で探してね

「どうやって探すんですかあ？  
てかあ地球まるまるって事ですかあ！？」

「え、せ、世界！？」

大丈夫大丈夫！

君達はもう普通の人間じゃないから  
世界を探すなんてすぐすぐ  
靈力を解放するとびつくりするから

「は、 はあ…」

ダストの反応の捕まえ方を説明するね！  
やり方は簡単、 靈数を見るのと同じやり方  
靈数の見方わかるよね？？

「あ、 はいわかります」

うん！ それじゃあまた……えーと…  
電話するからね

あと、ご飯はちゃんと食べないとダメだよ？

「あ、はい…あれ？」

「…切れちゃった…」

美紅は何気無しに携帯の画面を見ると  
日付は2010年7月4日となっていた。

「7月4日か…。」

あたし2年前なにしてたっけなあ…」

「綵、とりあえずここがどこか調べてみようよ」

美紅と綵は何か手掛かりになる物を探し始めた。

2010.7.4  
am5:13

夜が明けてきた。

数時間歩き続けた美紅達はコンビニを見つけ  
そこで地球へ帰って来てから初めての  
人との遭遇である。

自分達以外に人間を見るのが久しぶりの2人は  
思わず感激してキャツキャ騒ぐ。

まるで芸能人と会ったかの様なテンション。

コンビニの前でタバコを吸っている

中年のサラリーマンに声をかけてみる事にした。

「あ、あのう…えっと、は、始めまして…  
あた、あたしは…」

「バカッ！なに言ってるの！！

あはは、すいませ〜ん！

ち、ち近くに駅ってありますかあ？」

「……………」

男は黙ったまま携帯を見ながら

タバコをふかしていた。

返事を待つてはいたがこちらを振り向く事もない。  
完全なる無視である。

「あのう、…すいませ〜ん」

「綵：他の人にしよ？」

「…うん」

男性を後ろに首を傾げながら綵は

美紅に引つ張られてその場を後にした。

周りは住宅地が並んでいた綵は右、左と

キョロキョロ何かを探している様に家を見ていた。

決して何処かに向かっていると言う訳ではないが

2人はとにかく歩き、すれ違う人に話しかけてみる。

だが先程と同様に皆無視を決め込んでいた。

いや、これは無視ではない。

美紅達が見えていないと言った感じだった。

そうそれはまるで2人が幽霊の様で…。

2人がその事に気づくまでには時間は必要なかった。

「だよね…やっぱり」

「じゃなきゃありえないってシカトなんてさあ」

そう言いながら綵は近くの家の前に走って行くと

その家の前でほうきを持った女性に近寄り  
女性の瞳に顔を近づけた。

「ちょ、 ちょっと何やってんの〜！」

「…ほら、

こゝんなに顔を見ても何も言わないんだから」

綵はジロジロと女性の周りを見ていると  
そこに美紅がやって来て綵の腕を掴んだ

「こっち来なつて！」

「い…痛い痛い！ 痛いって！！」

「ご、 ごめん…！ だってあんな事するから」

「いいじゃん別に覚えてないんだからさあ」

「見えてなくてもダメなの」

「…あんた昔からそうだよな。  
あの時も無茶してさあ」

「あの時って？」

「あたしがまだ不良ぶってた時だったから

中学かな？ イジメられてた子をあんたがかばってボコボコになった時あったじゃん？」

「あゝあ、 あったあった！ あの時かあ。それで偶然綵達が通りかかって助けてくれたんだよね」

「正義感がバカみたいに強いつてゆーかそういうの許せない性格だよねあんたは」

「……それ、 褒めてんの…？」

「一応褒めてるつもりだけど」

そんな話をしながら2人が歩いていると前から白髪の老婆が杖をコツコツと地面を突きながら向かって来ていた。2人は会話をしながら老婆とすれ違う。

「…待ちなさい」

いきなり老婆が話しかけて来た。振り返ると腰が曲がった老婆の背が見えもっさりとした動作でこちらを向いた。

「美紅と綵菜ってのは…  
あんた達かい…？」

その言葉につい嬉しくなつて綵は即座に返事をした。  
地球に来てから何人かの人を見てきたが  
話かけられるのは初めてだった。

しかし何故この老婆は2人が見えるのだろうか。  
美紅も老婆に返事を返しその疑問を投げかける。

「あたし達…見えるんですか？」

「…見えとるよ。」

あんだ達“ダストブレイカー”なんだろう？」

（ダストブレイカー？）

（たぶん、ダストをやっつける人達って事だよ。  
だからあの事を言ってるんじゃない？）

2人でコソコソとやり取りをしてる内に  
美紅は自分が言つた言葉に引つ掛かり  
疑問が再び頭に現れた。

「…あれ？」

どうして知ってるんですか？」

「……………」

老婆は沈黙を決めたまま口を閉ざしてしまった。

## episode 11 管理人

突如2人の前に現れた白髪の老婆。

驚く事に彼女の目は両目とも失明していた。

ならば何故2人を見る事ができるのだろうか…。

そして彼女は2人の秘密を知っていた。

美紅と綵は老婆に連れられて二階建ての

小さなアパート前まで来ていた。

アパートの壁は所々にひび割れがあり家の扉は

茶色い鉄製の扉。

その扉を開けて中に入って行く老婆の後を2人も続く。

「おじゃま…します」

「（え…？ 何もない…）」

中は6畳の部屋が2つ、 タンスや机などの

家具は無く黒いレザーのソファアが一つあるだけ。

キッチンからも生活感が感じられない。

本当に何もなかった。

老婆はゆっくりとソファアに腰を下ろした。

「さて…じゃあ改めて自己紹介しようか」

） 管理人 ）  
S o u l m a n a g e r

- アパート -

2 0 1 0 . 7 . 4  
a m 9 : 0 7

「私はネル。

ダストブリーカーを管理する者…。

つまりあんた達の管理人だよ」

「は、 はあ」

「ネルさんの事は聞いてませんけど…」

「あんた達ハートに言われて来たんだろう？」

「はい。　そうです」

「はあ…全く」

「？」

ネルは溜め息をついた後しばらくして再び話し始めた。

「よく聞きなさい。」

ダストはあんた達の手には負えない」

「え…でもあたし達…」

「確かに霊数を見るとそれなりにはやっていける。  
でもダストは元は人間なんだよ。」

…私が何を言いたいかわかるかい？」

「……………」

「ダストは色んな種類がいる。

中には人間を装っているのもいてるんだよ。

例えば命乞いするダストを

あんた達は浄化…つまり殺さなければならぬ。

人間を殺すと言っても過言じゃない…。

事実本当に人間だからね」

「でもあたし達が戦ったのは  
化け物だったですけどお…？」

「あんなのはダストの初期段階に過ぎない。  
言っただろう？ ダストには色々な種類がいると  
人間と変わらないダストをあんた達はやれるのかい？」

「そ…それは……」

「あんた達がダストブレイカーになるには  
まだまだ早過ぎる…」

2人は黙り込んでしまった。  
ネルは彼女達の顔をじっと見つめると  
両手を差し出してこう告げた。

「あんた達の霊力を全て私に渡すと  
普通の魂に戻り天界へと導かれてそこで  
幸せに過ごす事ができる。  
強制はしないがあんた達の為に言ってるんだよ」

「で…でも地球が…」

「ダストの事なら心配はいらんよ。  
ジェラス達ならきつとやってくれる。

あんた達は自分の事だけを考えるんだ」

ネルの言う事は正しいかも知れない。  
自分達は命乞いをしている人間が目の前にいたら  
例えばそれがダストであったとしても  
果たして浄化する事ができるのだろうか。  
いや、 2人ともできるならこんな事やりたくはない。

「人間と言う生き物は決して強くはない。  
皆誰もが平和を願っているんだ。  
ダストブレイカーとは常に恐怖に怯え  
恐怖と闘い、そして恐怖を知る…。  
あんた達にはそれだけの器が整ってるのかい？」

「…本当にやめてもいいんですか？」

「…それは自分に問い掛けなさい。  
決めるのはあんただよ」

「あ、 あたしっ！」

話の途中で綵が言葉を発した。

「あたし…渡します。  
こんな事しなくていいなら…したくない…」

「……あんたはどうするんだい？」

「あたしは……このままでいいです。  
ダストをこのままほっといて…  
地球の皆があんな化け物になったままで…  
自分だけ幸せに過ごすなんて」

「美紅…」

「その事なら心配はいらんよ。  
ジェラス達が何とかしてくれる」

「そうだよ美紅  
ジェラスさんの霊数知ってるでしょ？  
あたし達なんかにはやっぱり出来ないんだって  
あんたが特別な何とかでもね」

「綵……」

美紅は綵の顔を見つめた後目線を落とす。  
綵の言う事も十分わかってる。  
だがどうしても踏ん切りがつかなかった。  
ネルの差し出す手を取れば楽になれる。  
これから訪れるであろう恐怖は消えて無くなる。

クッキーを持っていて食べようとした時  
お腹を空かせた子供がそばで見えたら  
自分の物だからといって食べてしまい満足するのか  
それともその子供に渡して苦痛を得るのか…。  
その感覚に近い状況だった。

他人なんて所詮は他人。

しかしもしその出来事がきっかけとなり  
子供は生き延びられるかもしれない。

ダストを浄化する事は苦痛であるに違いない  
まだ体験していないが初めてダストを見た時の  
あの恐怖はもう2度と経験したくはない。  
それでもその恐怖の先に救える何かがあるなら  
自分の行動で救える命があるなら  
このままダストブレイカーになるのはそんなに苦痛ではない。  
美紅の意志は固かった。

「やっぱりあたしはダストブレイカーとして  
このままダストを浄化していきます」

「美紅……」

「綵、別にあたしが特別だからとか  
責任とか…そう言うんじゃないの。  
本当に自分の意志だから」

「……………そう」

「だから綵は綵の考えで決めてくれていいからね。  
別に気を使っただけで残ってくれたりとか  
しなくていいんだよ  
綵の気持ちもわかるし」

「……仕方ないなあーもう。  
ならあたしも残るよ」

「だから気を使…」

「気なんか使ってないよ。  
あたしももう少し頑張ってみよーって思っただけ」

「嘘だよ、だってさっき…」

「嘘じゃないよ美紅。  
綵菜は真実を言ってる」

「確かに怖いけどさあ…  
でも…2人なら大丈夫な感じるじゃん？」

「じゃあもう一度だけ聞くよ？」

どんな結末が待っていたとしても  
あんた達はダストブレーカーとして  
歩んでいくんだね？」

ネルの質問に2人はお互いの笑顔を瞳に入れた後  
しっかりと頷いた。  
するとネルは少し黙り込むと一言告げる。

「2人とも…」

合格だよ  
「

「え？ 合格？」

「…合格ってどういう…」

「これはあんた達の意志を試したテストだったのさ  
ダストブレイカーは生半可な気持ちじゃできないからね」

「テスト？」

「あんた達はダストブレイカーとして認められた。  
これで安心して地球に送れるよ」

ネルは杖を掲げると景色がじんわりと変化していった。  
辺りは暗闇で埋め尽くされる。  
ここはラピュラリスだったのだ。

「え？　じゃあハートさんが間違えて2010年に  
送ったのも…全部演技だったのお！？」

「どおりで変だと思ったよ。  
だってみんな無視しちゃうんだもん」

「そうだよ美紅。

実際にあんた達が地球に戻っても同じ現象になる。  
あんた達は霊体だからね。

さっきの地球はシミュレーションとして  
忠実に再現してある。

実際に行くとあんた達が体験した事がそのまま  
本当に起こるんだ」

「じゃあ戻れても会話できないんですね…」

「肉体を取り戻せば会話は出来るが  
今はそれを教えてやる事はできないよ」

「靈力がたくさん必要だからですかあ？」

「靈力はほとんど必要ない。

肉体を持つと言う事は危険が大きいんだよ  
今はまずダストの浄化に慣れる…

それだけを考えなさい」

「…わかりました」

「慣れてからでもいいっか」

「あと、ハートに代わって今後は私が  
あんた達の面倒を見るからね」

「はい。 よろしくお願いします」

「お願いしまあーす」

「まずは地球に行ってダストを浄化して来る事。  
ダストの初期段階…ダスト1st  
通称D1と呼んでいる。

あんた達はD1の浄化とまだダストになっていない  
人間の確保、 わかったかい？」

「え？ ダストになっていない人がいるんですかあ？」

「中にはいるんだよ。

魂紛に触れさえしなければね…」

「見つけたらどうすればいいんですかあ？」

「美紅がその人間に触れると魂紛の影響を受けなくなるからとりあえず周りのダストを浄化したら安全な場所へ移動する。指示はまたその時に出すから」

「わかりました」

「これで本当に本当に地球に帰れるんだね」

「…みたいだね!!」

「頑張ろうね! 美紅!!」

「うん」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6247f/>

---

ETERNAL SAGA genus.

2010年11月24日16時19分発行